

『コリヤード 懺悔録』ポルトガル語全訳注  
—第十誡「他の財をみだりに望むべからず」ならびに七大罪等に関わる告解—

Tradução integral portuguesa dos *MODVS CONFITENDI et EXAMINANDI* (Roma, 1632) da autoria de frei dominicano Diego Colhado: Confissões dos pecados dos crentes japoneses seiscentistas contra o décimo mandamento de Moisés, os sete pecados mortais, etc.

日 埜 博 司

2004年度リスボアにおける在外研修中、いろいろな方々の暖かい協力と指導とに浴し、ドミニコ会宣教師ディエゴ・コリヤードの著書『懺悔録』(1632年、ローマ刊)に収められた日本語テキスト全文へポルトガル語の訳注を施すという作業をひとまず終えることができた。この間の経緯、なかんずく、訳を施すに際して特別に心がけたことについては『流通経済大学社会学部論叢』通巻第30号所収の拙稿「コリヤード『さんげろく』葡語訳注雑感——在外研修余滴として」に記述した。前記葡萄牙語訳注はしかるべき準備期間を経、リスボアもしくはマカオで上梓したいと思う。

これまでに記した解題で明らかにしたとおり、『コリヤード 懺悔録』には、いわゆるモーセの十誡ならびにカトリックの七大罪をめぐって日本人キリシタン信徒の犯した罪が、形式的な不完全さを残しつつも一応順を追って整理され掲載されている。ここで日本イエズス会版『サルヴァトル・ムンヂ』(刊行地未詳、1598年)によって十誡(まだめんとす。ポルトガル語 *Mandamentos* の音訳)が16世紀末の日本語へどのように訳されていたのかを改めて確認してみる。

○まだめんとすの事

第一 御一体のデウスを敬ひ貴み奉るべし

第二 貴き御名(掛)にかけて(空)む(聲)な(聲)し(聲)き(聲)ち(聲)か(聲)ひ(聲)す(聲)べ(聲)か(聲)ら(聲)ず

第三 どみんご・いは(祝)ひ(勤)日をつとめ守るべし

第四 汝の父母ふもに孝行すべし

第五 人を害すべからず

第六 邪淫(犯)ををかすべからず

第七 偷盗すべからず

第八 人にざんげん<sup>(謙言)</sup>をか<sup>(掛)</sup>くべからず

第九 他の妻をこひす<sup>(恋)</sup>べからず

第十 他の財をみだりに<sup>(妄)</sup>望むべからず

『コリヤード 懺悔録』にはそれぞれの誠をめぐる告解の冒頭に、本文よりやや大きな文字で見出し語が掲出してある。「二番の御掟に対しての科のこと」「三番のマンドメントについて」「四番の御掟について」「五番のマンドメントについて」「六番の御掟について」「七番のマンドメントについて」「八番の御掟について」などの文言がそうである。ただし、第六誠と並んで比較的多くの懺悔をその中に包含する第一誠にその見出しが見えないのと同様、この第十誠にも見出しがない。しかもそこに含まれる懺悔——後述するとおり、ただひとつだけである——は、第九誠「他の妻をこひすべからず」に関わる記述を僅かに含む。第九誠と第十誠とは内容的に高い親近性が存することを考慮し、拙訳注を編むに際しては、便宜上、当該の懺悔を第十誠の範疇に属するものと見なして、見出しとしては「十番のマンドメントについて」を仮に宛てるとともに、それがあくまで仮のものであることを示すため見出しの文言を〔 〕もしくは〔 〕で括る。

「第一 御一体のデウスを敬ひ貴み奉るべし」から「第八 人にざんげんをか<sup>(掛)</sup>くべからず」までそれぞれの誠に関わる告解にポルトガル語の訳注を施すに際しては、これまで、その文章の長さや、ひとつの誠に含まれる告解の数を考慮することなく、連載一回にひとつの誠を充てる原則を守ってきたが、今回はその原則を初めて崩す。それは、コリヤードの原著に、第十誠「他の財をみだりに望むべからず」をめぐる懺悔がたったひとつしか見えず、しかもその記述には、上述したとおり、第九誠「他の妻をこひすべからず」を想起させる文言が僅かに含まれるからである。したがって、本稿には、これに引き続いて現われる七大罪等をめぐる信徒の告解をすべて掲載し、連載一回分とする。

カトリックの七大罪とは、1592年、天草刊、ラテン文字版『ドチリナ・キリシタン』によれば、掲載順に、「驕慢」(soberba ou vaã gloria)・「貪欲」(avareza)・「邪淫」(luxuria)・「瞋恚」(yra)・「貪食」(gula)・「嫉妬」(enveja)・「懈怠」(accidia e priguça)である(括弧内のポルトガル語は、後述『ヴィゼウ司教ドン・ディオゴ・オルティスの小教理書』に用いられる表現をそのまま写したものの)。また『サルヴァトル・ムンヂ』によれば、これもまた掲載順に、「慢気」・「嫉み」・「貪欲」・「暴食」・「短慮」・「懈怠」であって、7番目の「邪淫」もしくは「淫欲」は下記に示す理由により抜け落ちている。

本稿のサブタイトルには「七大罪等」という文言を用いた。ここに「等」を添えるのは「七大罪」以外の事柄に関する告解が含まれるからにほかならない。姉崎正治はまさに本稿に収載する範囲(『コリヤード 懺悔録』の末尾およそ6頁)について「混雑」が存するとして、コリヤードを次のように批判する。

即ち「八番の掟」といふ節の中で、「末のマンドメントに就て」といふのは第十誠に関することであるが、前の如くに表題もなく、又第九誠は全部欠けてある。それから後の「五番について」は誠の五番でなく、ラテン訳に Circa gulam(飲食について)としてある通り、教会規則の五番であり、続いて「嫉妬そねみ」は七のモルタル科の一断片であり、最後に「慈悲の所作」の中には色々の條条が混

雑してゐる。<sup>1</sup>

姉崎の批判を大塚光信は次のように箇条書きに纏める。

- 1 第九誡(に関する告解)が欠落している。
- 2 「五番について」は誡の五番ではなく、教会規則の五番である。
- 3 「嫉妬そねみ」は七つのモルタル科の一断片である。
- 4 「慈悲の所作」の中にはいろいろな条項が混雑している。

そのうえで大塚は上記の 1～4 のそれぞれに反論を加えているのだが<sup>2</sup>、訳者として多少の補足なりコメントなりを添えておく。

1 に関して言えば、「末のマンダメントについて、申し顕はいたより外はもはや覚えませぬ」という言葉で始まる告解は、確かにやや唐突な印象を読者に抱かせる。この言葉を素直に解釈すれば、「末のマンダメント」すなわち第十誡に対する懺悔については、申し顕わした懺悔のほか何も記憶にございませぬ、という意味になるであろう。にもかかわらず、その直前に「申し顕はいた」はずの第十誡に関する告解はまったく見えない。つまり、第十誡に関し本来は存在したはずの別の告解が『コリヤード 懺悔録』から抜け落ちていることになる。また「末のマンダメント」を第十誡に限定するなら、姉崎の指摘どおり、第九誡は欠落していることになる。そのあたりから、姉崎の次のような批判が生ずる仕儀となる。「即ち原稿の後部に紛失や混雑があつたのを、誡に能く整理し得ないで印行したもののたることは明白である」<sup>3</sup>と。

これに対して大塚は、コリヤード『懺悔録』に見える「末のマンダメント」云々については、次のような解釈を施すべきであると説く。

「末のマンダメント」に関する懺悔には、上述のとおり、第九誡と第十誡、そのいずれをも想起させる文言が含まれる。大塚によれば、第九誡「他の妻をこひすべからず」は第六誡「邪淫ををかすべからず」との間に、第十誡「他の財をみだりに望むべからず」は第七誡「偷盗すべからず」との間に、それぞれ親近性が存するという。そう言われればなるほどそのとおりで、第六誡と第七誡が行為を禁ずるのに対し、第九誡と第十誡はそれぞれに対する思念なり願望なりを抱くことそれ自体を誡める。「第六誡と第九誡、第七誡と第十誡は内容的には重複する。同一ことがらに対し、実行するか思念(望み)にとどまるかの差だけである」<sup>4</sup>。『懺悔録』第六誡の項には 15 の、第七誡のそれには 10 の告解が、それぞれすでに紹介してある以上、「末のマンダメント」の項に似たり寄つたりの告解をそれ以上収載する必要をコリヤードは認めなかったのであろう。

---

<sup>1</sup> 『切支丹迫害史中の人物事蹟』546 頁。

<sup>2</sup> 『コリヤード さんげろく私注』臨川書店、1985 年、84～88 頁参照。

<sup>3</sup> 『切支丹迫害史中の人物事蹟』546 頁。

<sup>4</sup> 『コリヤード さんげろく私注』85 頁。



### ボッス『七つの大罪』に描かれた「貪食」

Carl Linfert 解説, *HIERONYMUS BOSCH* 日本語版(西村規矩夫/岡部紘三訳, 美術出版社, 1976年)より

2に見える「五番」が教会規則の五番であって誠の五番ではないと姉崎は述べるけれども, *Circa gulam* を単に「飲食について」と訳するのがそもそも適切ではない。この箇所に関する限り, *Circa gulam* の最適訳は「暴食について」でなければならない。

それを証するため百の屁理屈を並べるよりは, 上に掲げるヒエロニムス・ボッスの名作『七つの大罪』(プラド美術館蔵, 1475-80年, 油彩・板)を一瞥ありたい。眼をかたどった中央の円周に沿って七大罪の場面が描かれる。瞳の中心には蘇ったキリストがみずからの傷を指し示している姿が描かれ, その下に「心せよ, 心せよ, 神は見給う」という金言が記される。*Gula* と書かれた枠内は原画の円周の頂上に上下逆さで描かれている。今, その箇所だけを抜き出し反転して掲載するが, そこに描かれた男の——それどころか子供まで——見苦しい肥満ぶりは暴食の結果であり, 「暴食」——もしくは「貪食」——は紛れもなく七大罪のひとつである。

3に見える「嫉妬そねみ」が「モルタル科の一断片」にすぎないと姉崎は述べるけれど, そもそも「モルタル科の一断片」とは何のことか。「嫉妬」にせよ「嫉み」にせよ, 明白に七つのモルタル科すなわち七大罪のひとつを構成する。

4「慈悲の所作」について「色々の條条が混雑してゐる」と姉崎は指摘するが, キリシタンにおける「慈悲の所作」とは一体何か。ラテン文字版, 1592年, 天草刊『ドチリナ・キリシタン』は次のよう

に説明している<sup>5</sup>。参考までに( )内には、中世ポルトガルで編纂された『ヴィゼウ司教ドン・デ  
イオゴ・オルティスの小教理書』に見えるポルトガル語の対応表現を書き入れておく<sup>6</sup>。

IIFI NO XOSA [慈悲の所作]

Iifi no xosa ua jūxi ari. Fajime nanatçu ua, xiqixin ni atari, nochi no nanatçu ua, Spiritu ni ataru  
nari [慈悲の所作は十四あり。初め七つは、色身に当たり、後の七つは、スピリツに当たるな  
り].

XIQIXIN NI ATARV NANATÇV (NANATCV *in textu*) NO COTO [色身に当たる七つ  
の事].

Fitotçu niua, vyetaru mono ni xocu uo atayuru coto [一つには、餓ゑたる者に食を与ゆる事].  
("dar de comer ao faminto")

Futatçu niua, caxxitaru mono ni mono uo momasuru coto [二つには、渴したる者に物を飲ます  
る事]. ("dar de beber ao que há sede")

Mitçu niua, fadaye uo cacuxi canuru mono ni yru<sup>□</sup> uo atayuru coto [三つには、膚を隠しかぬる  
者に衣類を与ゆる事]. ("vestir ao desnudo")

Yotçu niua, biõnin uo itauari mimõ coto [四つには、病人を労はり見舞ふ事]. ("visitar os  
doentes")

Itçutçu niua, anguia no mono ni yado uo casu coto [五つには、行脚の者に宿を貸す事].  
("hospedar ao que nõ teem pousada")

Mutçu niua, torauarebito no mi uo vquru coto [六つには、囚われ人の身を請くる事]. ("remiir os  
cativos")

Nanatçu niua, xigai uo vosamuru coto, core nari [七つには、死骸を収むる事、是なり]. ("enterrar  
os mortos")

SPIRITV NI ATARV NANATÇV (NANATCV *in textu*) NO COTO [スピリツに当たる七  
つの事]

<sup>5</sup> NIPPON NO IESVS no Companhia no Superior yori Christan ni sõtõ no cotouari uo tagaino mondõ no gotoqu  
xidai uo vacachi tamõ DOCTRINA. IESVS NO COMPANHIA NO COLLEgio Amacusa ni voite Superiores no von  
yuruxi uo cõmuri, core uo fan to nasu mono nari. Toquini go xuxxe no NENQI. 1592 [『日本のゼズスのコンパニヤのス  
ペリヨルよりキリシタンに相当の理を互ひの間答の如く次第を分かち給ふドチリイナ。ゼズスのコンパニヤのコレジョ  
天草に於いてスペリヨウレスの御許しを蒙り、これを版と為すものなり。時に御出世の年紀 1592]], pp.96-97.

<sup>6</sup> O *Cathecismo Pequeno de D. Diogo Ortiz Bispo de Viseu*, Estudo literário e edição crítica de Elsa Maria Branco da  
Silva, Lisboa, Edições Colibri, 2001, pp.218, 219.

Fitotçu niua, fito ni yoqi yqen uo cuuayuru coto [一つには、人に善き異見を加ゆる事].  
 (“cöselhar ho duvidoso”)

Futatçu niua, muchi naru mono ni michi uo voxiyuru coto [二つには、無智なる者に道を教ゆる  
事]. (“ensinar ho ignorâte”)

Mitçu niua, canaximi aru mono uo nadamuru coto [三つには、悲しみある者を宥むる事].  
 (“consolar ho triste”)

Yotçu niua, xeccã subeqi mono uo xeccan suru coto [四つには、折檻すべき者を折檻する事].  
 (“castiguar o pecador”)

Ițçu niua, chijocu uo cannin suru coto [五つには、恥辱を堪忍する事]. (“perdoar ho que nos  
offendeo”)

Mitçu niua, Proximo no fusocu uo yurusu coto [六つには、ポロシモ(=隣人)の不足を赦す事].  
 (“soffrer e soportar ao yrado e carreguado”)

Nanatçu niua, xöji no fito to, mata vare ni ata uo nasu mono no tameni, Deus uo tanomi  
tatematçuru coto, core nari [七つには、生死の人と、また我に仇を為す者の為に、デウス  
を頼み奉る事、是なり]. (“orar pollos proximos”)

『コリヤード 懺悔録』の体裁から判断して「慈悲の所作に対して」の項に包含されると考えるのは、下記3つの告解である。

- 1 異教徒のオランダ人海賊へ武器・弾薬を売る
- 2 パードレに宿を貸さぬという誓文を立てる約束をし、隣人にもその旨勧める
- 3 パードレに宿を貸さぬという誓文を立てる(一度は神・仏に掛けて、一度は本のデウスに掛けて、一度は村の乙名らに命ぜられて)

大塚光信は「慈悲の所作」の項に含まれるべき告解は1だけであるとして、2および3に関しては岩波文庫版の校訂本で「キリシタンの妨げについて」という標題を「私に設け」る措置を採っている<sup>7</sup>。

「キリシタンの妨げについて」という表現は『懺悔録』本文に実際用いられているものではあるけれど(p.56, l.13), 標題として採用するほどの汎用性・独立性を有するものなのかどうか訳者は知らない。

さらにまた思考するのだが、「慈悲の所作」と言うなら、むしろ上記の2と3こそそれに該当するのではあるまいか。すでに引用した「慈悲の所作」のうち「色身に当たる七つの事」の「五つ」には「行脚の者に宿を貸す事」と謳われている。幕府当局の追捕を受けるカトリック宣教師は「行脚の

---

<sup>7</sup> 大塚光信校注『コリヤード 懺悔録』82頁、脚注六。大塚光信著『コリヤード さんげろく私注』臨川書店、1985年、87～89頁参照。

者」に該当しないのであろうか。『ヴィゼウ司教ドン・ディオゴ・オルティスの小教理書』に現われる“*hospedar ao que nã teem pousada*”(宿所を持たぬ者へ宿を提供すること)という表現は、安住の居所を持たず信徒の隠れ家を渡り歩く潜伏パードレへ宿を貸すか否か、を問題にする 2 および 3 の告解文とはよく呼応すると思われる。

1 に関して、「オランダのエレゼス(=異教徒)海賊人」へ「鉄砲薬」を売ることは、確かにカトリック勢力を不利に陥れる所為ではあっても、正当な商行為の範疇に入るようであり、上に引用した『ドチリナ』の条々に拠る限り、なぜこれが「慈悲の所作」に反する科であるのか、訳者には理解できない(この点について高教を乞う)。

「その外、我は大悪人のござるによって云々」という信徒による総括の文言や、聴罪司祭の激励の言葉は、「色々の條条が混雑してゐる」かどうかの考察の対象からは、当然外す。

これまでの例に倣い、『サルヴァトル・ムンヂ』に見える「第九第十のまだめんと」および「七のもるたる科に付てこんしゑんしやを糺すべき条々」それぞれに関する問い掛けの条々を掲載し<sup>8</sup>、『懺悔録』に見える告解のひとつひとつとの照応ないしは非照応ぶりを検討するための便宜とする(適宜句読点を補い、キリシタン用語がそのままポルトガル語で用いられている場合はこれをカタカタに直す。読みやすさを考え、適宜ひらかなをルビの形で漢字に開き原文には見えない送りかなを送る等の措置を施す)。

末筆ながら、訳注に用いた『ヴィゼウ司教ドン・ディオゴ・オルティスの小教理書』からの引用文の解釈について、日置圭一・内藤理佳御夫妻の教示をいただいたことを特筆し謝意を表する。

## 第九第十のまだめんと

一、六<sup>(過)</sup>ばんのまだめんとに<sup>(罪)</sup>あらはず条々の内、何れにてもあれ、たとひ所作には<sup>(過)</sup>とげずとも、望みたる事ありや。

<sup>8</sup> 「七のもるたる科」とは言うまでもなくカトリックの七大罪を指す。が、実際『サルヴァトル・ムンヂ』に挙げてあるのは、本文に示すとおり、六つの大罪だけであり、本来記載されているべき「邪淫」が抜けている。「邪淫」に関して言えば、『サルヴァトル・ムンヂ』の「第六のまだめんと」の項目に、具体的な 12 の問い掛けが箇条書きされているうえ(拙訳「日本イエズス会版『サルヴァトル・ムンヂ』ポルトガル語訳注——第六誠「邪淫を犯すべからず」に関する 12 の問い掛け」『流経法学』通巻第 9 号所収)、「第九第十のまだめんと」に関しても「邪淫」もしくは「淫欲」に関する問い掛けが 3 つ列記されている。それら 3 つの問い掛けにおいては、本文に示すとおり、淫らな行為に及ばずとも、ただその種の思念・願望に逢着したことありや否や、が問われている。『サルヴァトル・ムンヂ』の編者は、「邪淫」に関する問い掛けは「第六のまだめんと」および「第九第十のまだめんと」の項目に掲げたものをもって充分と考え、同趣旨の問い掛けを「七のもるたる科に付てこんしゑんしやを糺すべき条々」には繰り返し書き出すに及ばぬと判断したのであろう。

二、同く、其まだめんとにあらはす科の内、何れをなりとも思ふ時、悪念なりとわきまへながらそれをおもしろく思ひよろこぶによて其念を留めたりや。

三、第十ばんのまだめんとにあらはす条々の内、いづれにてもあれ、たとひ所作にはとげずとも望みたる事ありや。

## 七のもるたる科に付てこんしゑんしや\*を糺すべき条々

\* ポルトガル語 *consciencia* の音訳。「良心」。

### 第一 まんきの事(慢気)

一、他人をいやしめたる事ありや。

二、もるたる科をしたる事をじまんして人に語りたる事ありや。喩へばけなげ者とおもはれんとて人を殺したる事などをかたるたぐひの事也。

三、此等の事をせずといへども、身をほめられんとてしたるやうにいひたりや。

四、たとひ善事なりとも人に善人と思はれんとの心あてばかりにてせし事ありや。

### 第二 ねたみの事(嫉)

一、ぼろしも\*の上によき事出来する時、そねみかなしみたりや。

\* ポルトガル語 *proximo* の音訳。「隣人」。

二、同く悪事出来する時、よろこびたりや

### 第三 どんよくの事(貪欲)

一、財宝を求めんとてもるたる科を致したる事有や。

二、ひにんのうえかつゆるを見て、力ありながら合力せざりしや。

### 第四 ぼうしよくの事(暴食)

一、ときやくするほど物を食しすぎしたる事ありや。

二、分別をくらますほど酒をのみたる事ありや。

三、同く、人にも分別をくらますほど酒をすゝめたる事ありや。

### 第五 たんりよの事(短慮)

一、けんぞく或は他人に対してふかきいかりををこし、いごんをさんぜん為に仇をなさんと思ひたる事ありや。

### 第六 けだいの事(懈怠)



- 一、わがあにまの扶かる道をならひしる事に油断ありや。  
 二、我が油断によて一円談義を聴聞せざるや。  
 三、けんぞくの上のさいばんゆるかせなるによて下人・子どもの身持あしき事ありや。

[Iũbanno mandamiento<sup>9</sup> ni tçuite [十番のマンダメントについて]]

[Peccata circa decimus præceptum.]

[Pecados acerca do décimo mandamento.]

UMA CONFISSÃO ACERCA DO DÉCIMO MANDAMENTO

Suye no mandamiento nitçuite, mōxi aravaita iori foca va mofaia voboie maraxenu: tada tanin<sup>10</sup> no fũfu zaifō vo nozomi marasure domo, sore vo nusumō to vomoi mo ioranu<sup>11</sup> coto de gozaru. Tada vare mo ano iōna mono vo mottarō ni va!<sup>12</sup> to bacari zonji maraxita tocorode, sanomi fucai toga de

<sup>9</sup> «Daijū, ta no tacara uo midarini nozomu subecarazu» [第十, 他の財を妄りに望むべからず] (*NIPPON NO IESVS no Companhia no Superior yori Christan ni sōtō no cotouari uo tagaino mondō no gotoqu xidai uo vacachi tamō DOCTRINA. IESVS NO COMPANHIA NO COLLEgio Amacusa ni voite Superiores no von yuruxi uo cōmuri, core uo fan to nasu mono nari. Toquini go xuxxe no NENQI. 1592* 『日本のゼズスのコンパニヤのスペリヨルよりキリシタンに相当の理を互ひの間答の如く次第を分かち給ふドチリイナ。ゼズスのコンパニヤのコレジヨ天草に於いてスペリヨウレスの御許しを蒙り, これを版と為すものなり。時に御出世の年紀 1592』, p.51); «Não desejarás a mulher do teu próximo, o seu servo, a sua serva, o seu boi, o seu burro, e tudo o que é do teu próximo» (*Bíblia Sagrada. Para o Terceiro Milénio da Encarnação*).

<sup>10</sup> Tanin [他人]. Betno fito [別の人]. *Outro homem que não he parente* (*Vocabulario*, f.240).

<sup>11</sup> Cf. Vomoiyori [思ひ寄り], Vomoiyuru [思ひ寄る], Vomoiyotta [思ひ寄った]. *Vir ao pensamento, ou alembrarse como de fazer algũa cousa por si sem ser rogado, &c.* ¶ Vomoiyoraxerarete coreuo cudasaruru catajiqenai [思ひ寄せられてこれを下さる辱い]. *Fizestes me merce de me dardes isto lembrando vos de mim, agradeço volo muito* (*Vocabulario*, f.281).

<sup>12</sup> Quanto ao presente optativo, o próprio frei Colhado explica-o na sua *ARS GRAMMATICÆ LAPONIÆ LINGVÆ: «præteritum optatiui est secunda vox futuri postposita particula mono vo! [ものを!] v.g. nigueô zu mono vo! [逃げうずものを!] o si figissem! idem fit hoc modo nigueta raba iocarō mono vo [逃げたらばよからうものを], aliquando solum dicunt, nigue tarōni va! [逃げたらうには] etiam dicunt, niguete arō ni ua iocarō mono vo! [逃げてあらうにはよからうものを]» (p.22)*

aru mai to vomoi marasuru. Sari nagara, tennen<sup>13</sup> sono nozomi ga vocoru<sup>14</sup>  
toqi, toniocu<sup>15</sup>, xiny<sup>16</sup>, sonemi<sup>17</sup> nando no toga ni naru fodo no nen ga, mi va  
mivaqezu<sup>18</sup> xite tori majieta<sup>19</sup> coto mo arō fodoni, Deus no mimaie ni aru<sup>20</sup>  
gotoqu<sup>21</sup> ni aravaxi marasuru.

すゑ 末のマンダメントについて、申し顕はいたより外はもはや覚えませぬ。

ただ他人の夫婦・財宝を望みまらずれども、それを盗まうと思ひも寄らぬこ

とでござる。ただ我もあの様なものを持ったらうには! とばかり存じまらしたと

ころで、さのみ深い科であるまいと思ひまらす。さりながら、天然その望み

が起こる時、貪欲・瞋恚・嫉みななどの科になるほどの念が、身は見分けず

して取り交へたことも有らうほどに、デウスの御前に在る如くに顕はしまらす。

<sup>13</sup> Tennen [天然]. *Naturalmente, ou cousa natural* (Vocabulario, f.255).

<sup>14</sup> Vocori [起こり・興り・熾り], Vocoru [起こる・興る・熾る], Vocotta [起こつた・興つた・熾つた]. *Brotar, ou aleuantarse, ou excitarse*. ¶ Dōxinga vocoru [道心が起こる]. *Ter desejo de se fazer religioso, ou virtuoso, &c.* ¶ Teqiga vocoru [敵が興る]. *Aleuantarse inimigos*. ¶ Yamaiga vocoru [病が起こる]. *Adoecer*. ¶ Cocoroni vocoru [心に起こる]. *Vir à memoria, ou ao pensamento*. ¶ Item, *Acenderse o fogo de caruão*. *Vt, Figa vocoru* [火が熾る] (Vocabulario, f.276v).

<sup>15</sup> Tonyocu [貪欲] i, Yocuxin [欲心]. *Auareza, ou cubiça* (Vocabulario, f.261).

<sup>16</sup> Xin-i [瞋恚]. *Icari* [怒り]. *Agastamento, ou colera* (Vocabulario, f.303).

<sup>17</sup> Sonemi [嫉み]. *Enueja* (Vocabulario, f.225).

<sup>18</sup> Mivaqe [見分け], Mivaquru [見分くる], Mivaqeta [見分けた]. *Vendo discernir*. *Vt, Iento acutono futatçuuo aqiracani mivaqe saxerareta* [善と悪との二つを明らかに見分けさせられた]. *Mon. Claramente discernio o bem, & o mal* (Vocabulario, f.162v).

<sup>19</sup> Torimajiye [取り交へ], Torimajiyuru [取り交ゆる], Torimajiyeta [取り交へた]. *Misturar com as mãos* (Vocabulario, f.275v).

<sup>20</sup> Ari [在り], Aru [在る], Atta [在った]. *Auer, estar, ter*. ¶ Item, *Dizer de pessoa honrrada*. *Vt, Tonosama sonatano cataye gozarôto atta* [殿様そなたの方へ御座らうとあつた]. *O tono disse que iria a vossa casa* (Vocabulario, ff.12-12v).

<sup>21</sup> «gotoqu» *in textu*. Gotocu [如く], l, Gotocuni [如くに]. *Adu. Como, ou assi como*. *Vt, Mayeno gotocu* [前の如く]. *Assi como dantes* (Vocabulario, f.122).

末のマンダメントについては、申し顕わしたよりほかのことは何も覚えてはおりませぬ。他人の妻やら財産やらが手に入ればよいがと望みはしましたが、それを盗み取ろうなど思いもよらぬことございました。あのようなものが私の手に入れば! と存じましただけで、さほど深い罪ではあるまいと思えます。しかしながら、心にそのような望みが自然に起こるとき、それが貪欲・瞋恚・嫉みなどの罪に当たるのであろうという思いを抱いた——どの望みを抱くのが、どの罪に当たるのかということをお別せぬまま——ことを、今、デウスの御前にいるかのような心持ちをもって告白致します。

*Circa vltima præcepta nihil recordor præter supradicta: quamuis enim desiderauerim diuitias, res, & vxores alienas: hoc tamen non fuit animo neque in mentem venit quod iniuste & furtiue huiusmodi acciperem, aut possiderem: sed tantum desiderauit habere res illis similis: vnde credo nõ fuisse magnum peccatum. si forsan quando huiusmodi occurrunt cogitationes, aliquid me non discernente admixtum est cupiditatis aut inuidiæ quod ad peccati naturam pertigerit: de hoc quidquid fuerit, sicut coram Deo est præsens, me accuso.*

Quanto ao último mandamento de Moisés, não me lembro de nenhuns pecados senão aqueles que já confessei. Desejei por certo a mulher e as riquezas dos outros, mas estava longe de roubá-las. Só sempre pensei: oxalá tivesse levado aquelas coisas nas mãos! – não me parecendo isso um pecado tão grave. Contudo, quando me ocorreram de modo natural os tais desejos, sempre estive consciente, segundo me parece, de isso constituir os pecados de avareza, ira, ciúme, etc., sem discernir qual desejo corresponderia a qual pecado. Confesso com reverência o que tenho dito, no sentimento de encontrar-me em digníssima presença de Deus.

[Ichibano<sup>22</sup> ni tçuite [一番について].]

<sup>22</sup> Na *DOCTRINA* acima citada enumeram-se os sete pecados mortais:

«¶ Fitotçu niua qeôman [一つには驕慢].

Futatçu niua tonyocçu [二つには貪欲].

Mitçu niua jain [三つには邪淫].

Yotçu niua xiny [四つには瞋恚].

Itçutçu niua tonjiqi [五つには貪食].

Mutçu niua xitto [六つには嫉妬].

Nanatçu niua qedai [七つには懈怠]. Core nari [是なり].

Core uo subete Mortal toga toyũ nari [是を総てモルタル科と云ふなり]» (*NIPPON NO IESVS no Companhia no Superior yori Christan ni sôtõ no cotouari uo tagaino mondõ no gotoqu xidai uo vacachi tamõ DOCTRINA*, p.69).

cacàru iõni iro iro no jen guiõ vo tçutome marafuru.

## Goban ni tcuite.

**V** Atacuxĩ ga cūgai no mōno narēba, amata no xiru fito vo mōchi maraxita. sō gozarēba, aruiva sōno cāta ni furumai vo ūqe, aruiva miga iādo ni fore vo iōbi ioxe, mōxi va Niffon catāgui ni, facāzzuqi no jīgui va fei jei no cōto narēba, faqe vo .l. goxu vo taburu xi auaxē ga xīgueō goz tta. sōno ūchi ni ichinīdo nomi sūgoite, faqe ni ioi fitatte, nani mo voboienu fōdo, fōnxō vo cūtto vxinai maraxita. maichīdo va, sanomi fucō va tabenēdomo, atamāga itai, faqe mo mōdōxi, qi made mo fucōxi sonjerare maraxita.

Aru tòqi mo daijinaru qiacuxu ni fannin miga cataie vōgiatte futçuca no aida, fore vo iocuriū itaita tocorōde, fucōxi facanāga atte, facamori mo xi, mata sono qiacu vōba jefi tomo to xiite tocācu iottari nagara futçuca ioi itaxi maraxita.

Mata: quaresma ni, ichīdo, xiqi no je jun ni mo ichīdo gentio no cāta ni vori marafurēba, sono teixu vo xōban xite nicujiqi vo itaxi maraxita.

Sōno ūie ni fando canāi nagara sancta Iglefia, no ichi jiqi je junto mōsu vo iaburi maraxita.

Mata vōn jiqi tamen no tçuiō vo tamōchi maraxeide, sōre ni tçuqete fai fai fucōxi zzutçu sūgoxi maraxita.

Xit-

『コリヤード 懺悔録』「五番について」

七大罪のひとつ「貪食」に関する告解 5 点が収載される。大塚光信架蔵本。大塚光信『コリヤード さんげろく私注』(臨川書店, 1985 年)より

## xitto fonemi ni tçuite

**V** Arera xiqi no mono no fūga iōte, iūzzuri cāre cōre, nivacani fucujin ni narareta vo mite: fate va miga cōto no iūie bacāri ni fūga varuīga, qiocunāi to zonjite: qīga tçumārte: fucō canaximi, ta no tacāra vōba fone mi maraxita.

Sōno fōca aru fito no cūji nitçuite, mi va sōno fiqi xite, cā-tçu fōdo coreocu jtasō to iacu sōcu xitarēba: zuibun, sōre ni nen vo ire, naru fōdo fataraita rēdomō, sōno cūji vo xii tādafu aīda ni quānbun no vairo, vel, maito vo tōri maraxita.

## Iifi no xōsa ni taixite.

**V** Atacūxi teppō gufuri vo tçucuru mōno de gozarēba, Holanda no herejes cai zōgunin ni sōno cusūri vo vri, sono vie fiorō teppō sono tama, ixibiia, cāi xen no dōgu vo mo mina tāzzune idaxi, sōno tameni cāi maraxitē gozāru. tocacu arera va corobi Christian to, mata cai zōcu no mōno narēba, sadamete faiōni mōxita cōto vo vri, tçuzu furu ga von imaximē de gozarō to, sui sat itaxi nagara ionen no aīda ni xi tçuzzuqi maraxita.

Mata ima no faiaru Christian no samatāgue nitçuite, mīga atari ie buguiō ga qite, gaibun Christian xu ni padre, tachi ni iādo vo cāxi, sōre ni auare mai to no fan vo fūie, mata cōre vo navo catō sadamuru tame ni xei mōn no iacu fōcu vo faxeraruru tocōroni, vare mo sono iacu fōcu voxī, tonari no mono ni mo dōjen no iqen ocuvaie maraxita.

Cōre va fando de gozatta ni, ichīdo va camī fotoqe ni caqete cō itafu mai to xei mōn tate to ijtçuqerareta facai ni, mi va camī fotoqe va nini tatazu, fon no xei mōn no dai mocu de nai tocorōde tçuīde ni tōgueīdemo daiji aru mai to zonjite gentio no buguiō vo tabacaru tame bacāri ni tate maraxita. ichido va, fate, fon no Deus ni caqete

## 『コリヤード 懺悔録』

「嫉妬そねみ」および「慈悲の所作」に関する告解が収載される頁。告解の分類について多少の混乱ないしは未整理が認められるようである。大塚光信架蔵本。大塚光信『コリヤード さんげろく私注』より

[Circa insolentiam.]  
[Acerca da soberba.]

PRIMEIRA CONFISSÃO ACERCA DO PECADO MORTAL DA «SOBERBA»

R. Nanatçuno mortal toga no vie no aiamari vo mōxi aravaxi marasuru<sup>23</sup> ni: mazzu ichiban ni taixite, vatacuxi, fito iori qiga tçuiô<sup>24</sup>, chicara no curabe<sup>25</sup> mo nai mono to vomovaruru tameni, sono fomeraretasa<sup>26</sup> de, nido cugai<sup>27</sup> ni tçucuri<sup>28</sup> tegara<sup>29</sup> vo catari maraxita. Ichido no va tçucurigoto<sup>30</sup> bacari, suoxi no giban mo nai no vso<sup>31</sup> de attani, fitotabi no va tatoieba

---

<sup>23</sup> «marasururu» in textu.

<sup>24</sup> Tçuyoi [強い]. *Cousa rija, ou forte*. Tçuyosa [強さ]. Tçuyô [強う] (*Vocabulario*, f.251v). «tçniô» in textu. Correção conforme a «Errata sic Corrige» na página 66.

<sup>25</sup> Curabe [比べ]. *Competição, ou o cotejar algũa cousa com outra*. *Vt*, Tencani voite vonna curabeno atta toqi [天下に於いて女比べのあつた時]. *Quando na Tenca ouue cotejar, & comparar as molheres* (*Vocabulario*, f.66).

<sup>26</sup> Fome [褒め], Fomuru [褒むる], Fometa [褒めた]. *Louuar* (*Vocabulario*, f.100v). «fomaretasa» in textu.

<sup>27</sup> Cugai [公界]. *Publico*. *Vt*, Cugaiye izzuru [公界へ出づる]. *Sair a publico*. ¶ Cugaino daidô [公界の大道]. *Caminho, ou estrada publica por onde todos passão*. ¶ Cugaiuo itasu [公界を致す]. *Tratar em publico, visitando, correndo com cumprimentos, &c.* ¶ Cugaiuo yamuru [公界を辞むる]. *Deixar de correr com estas cousas, & negocios publicos* (*Vocabulario*, f.63v).

<sup>28</sup> Tçucuri [作り], Tçucuru [作る], Tçucutta [作った]. Aqui não se utiliza com o sentido de «Fazer. Cõmummente se diz de cousas que se fazem com mãos», mas com o sentido de «Fingir, ou contrafazer algũa cousa» (Cf. *Vocabulario*, f.245v).

<sup>29</sup> Tegara [手柄]. *Obra assinalada, ou façanha*. ¶ Tegarauo suru [手柄をする], l, Tegarauo arauasu [手柄を顛わす]. *Fazer façanhas*. ¶ *Item, Obra prima de mãos*. *Vt*, Tegarauo tçucuru [手柄を作る]. *Esmerarse em fazer algũa obra bem feita* (*Vocabulario*, f.253).

<sup>30</sup> No *Vocabulario* regista-se o substantivo «Tçucuricoto» [作り事], que se define como «Cousa fingida, ou contra feita» (f.382) e que tem o mesmo sentido que «Tçucurigoto» [作り事]. Aqui se registam também as semelhantes expressões tais como «Tçucurigane» [作り金] (*Metal falso, ou composto artificialmente como prata falsa, &c.* f.245v); «Tçucurigauo» [作り顔] (*Rosto fingido, ou contrafeito*. f.245v); «Tçucurimonogatari» [作り物語] (*Pratica fingida, ou fabulosa*. f.246); «Tçucuriuarai» [作り笑い] (*Riso fingido*. f.246); «Tçucuriyamai» [作り病] (l, Sacubiô [作病]. *Doença fingida*. f.246); «Tçucurigoye» [作り声] (*Voz fingida, & contra feita*, f.382).

<sup>31</sup> Vso [嘘]. *Mentira*. ¶ Vsouo tçucu [嘘をつく]. l, Vsouo yû [嘘を言ふ]. *Falar mentiras* (*Vocabulario*, f.289).

xibuichi fodo macoto<sup>32</sup> de gozatta redomo, nocoru tocoro va xōtoçu narisō  
mo nai coto nareba, samazamano nen dacumi<sup>33</sup> vo soie tçuqete, micata cara  
qicaruru xu, zuibun macoto ni vqeraruru iōni saicacu<sup>34</sup> itaxi maraxita.  
Futatabi nagara no daimocu va fucai toga de gozatta.

弟子 <sup>なな</sup>七つの<sup>とが</sup>モルタル科<sup>うへ</sup>の上<sup>あやま</sup>の<sup>ま</sup>誤<sup>あら</sup>りを<sup>ま</sup>申し<sup>いちばん</sup>顕<sup>は</sup>しま<sup>ら</sup>する<sup>に</sup>に、先<sup>づ</sup>一<sup>番</sup>

対<sup>たい</sup>して、私<sup>わたくし</sup>、人<sup>ひと</sup>より<sup>き</sup>気<sup>つよ</sup>が<sup>ちから</sup>強<sup>くら</sup>う、力<sup>な</sup>の<sup>もの</sup>比<sup>おも</sup>べ<sup>ため</sup>も<sup>な</sup>無<sup>い</sup>者<sup>と</sup>思<sup>は</sup>る<sup>る</sup>為<sup>に</sup>に、その

褒<sup>ほ</sup>め<sup>ら</sup>れた<sup>さ</sup>で、二<sup>に</sup>度<sup>ど</sup>公<sup>こう</sup>界<sup>がい</sup>に<sup>つく</sup>作<sup>て</sup>り<sup>が</sup>手<sup>かた</sup>柄<sup>を</sup>語<sup>り</sup>ま<sup>ら</sup>した。一<sup>いち</sup>度<sup>ど</sup>の<sup>は</sup>作<sup>つく</sup>り<sup>ごと</sup>事<sup>ば</sup>か

り、少<sup>すこ</sup>し<sup>ち</sup>の<sup>ばん</sup>地<sup>な</sup>盤<sup>うそ</sup>も<sup>う</sup>無<sup>い</sup>の<sup>ひ</sup>嘘<sup>と</sup>で<sup>た</sup>あ<sup>た</sup>った<sup>に</sup>に、一<sup>いち</sup>度<sup>ど</sup>の<sup>は</sup>、喩<sup>し</sup>へ<sup>ば</sup>四<sup>し</sup>分<sup>ぶん</sup>一<sup>いち</sup>ほ<sup>ど</sup>真<sup>ま</sup>で

ご<sup>ご</sup>ざ<sup>ざ</sup>った<sup>れ</sup>れ<sup>ども</sup>、残<sup>のこ</sup>る<sup>ところ</sup>所<sup>しやうとく</sup>は<sup>さ</sup>生<sup>ま</sup>得<sup>え</sup>なり<sup>さ</sup>う<sup>も</sup>な<sup>い</sup>こ<sup>と</sup>な<sup>ら</sup>ば、様<sup>さま</sup>々<sup>ざま</sup>の<sup>ねん</sup>念<sup>だく</sup>工<sup>く</sup>み<sup>を</sup>を

添<sup>そ</sup>へ<sup>つ</sup>付<sup>み</sup>けて、味<sup>あじ</sup>方<sup>かた</sup>から、聞<sup>き</sup>か<sup>る</sup>る<sup>しゆ</sup>衆<sup>ずいぶん</sup>、随<sup>まこと</sup>分<sup>う</sup>真<sup>ま</sup>に<sup>う</sup>受<sup>う</sup>け<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>様<sup>やう</sup>に<sup>さい</sup>才<sup>かく</sup>覚<sup>した</sup>致<sup>し</sup>ま

ら<sup>し</sup>た。二<sup>ふた</sup>度<sup>たび</sup>な<sup>が</sup>ら<sup>の</sup>題<sup>だい</sup>目<sup>もく</sup>は<sup>ふか</sup>深<sup>とが</sup>い<sup>と</sup>科<sup>で</sup>ご<sup>ご</sup>ざ<sup>ざ</sup>った。

弟子 七つのモルタル科に関する過ちを告白することいたしますが、まず一番目の科に関して私は、他人より精神も強く、体力も比類なく強い者であると思われるため、そうして他人から褒められたいあまりに、二度、世間に向かって手柄話をいたしました。一度目のそれはまるで作り事であり、何の根拠もない真っ赤な嘘でございました。二度目のそれは四分の一ほどは本当のことでございましたが、そのほかは実現しそうなことでもありますから、意図的にさまざまな作為を施しまして、私の話を聞いた人々がかなり真に受けるよう工夫いたしました。いずれの話も深い科でございました〔作り手柄を語る〕。

*R. Perueniendo ad declarandum defectus, quos circa septem peccata mortalia comissi: in primis circa primum: vt ab hominibus reputarer vir fortis animo, & robustus viribus, cui nullus posset comparari, hoc*

<sup>32</sup> Macoto [真]. *Verdade* (Vocabulario, f.148v).

<sup>33</sup> «Nendacumi», que não se regista como um substantivo no *Vocabulario*, é uma palavra composta por dois substantivos: «Nen» [念], isto é, «pensamento» (Vocabulario, f.180v) e «Tacumi» [巧み], ou seja, «Inuenção» (Vocabulario, f.235v).

<sup>34</sup> Saicacu [才覚]. *Industria, prudencia, &c.* ¶ Saicacuuo megurasu [才覚を廻らす]. *Vsar de industria, & inuenção* (Vocabulario, f.215v).

*laudis desiderio bis in publico enarraui confictas a me actiones famosas, quas dixi fecisse: vna ex illis fuit totale mendacium absque aliquo fundamento veritatis; alia vero; & si: v.g. habuerit quartam partem veritatis; cum reliquum naturaliter non esset vel apparens tot inuentiones, & circumstantias illi adiunxi, vt quantum in me fuit procurauerim quod in omni euentu auditores illud crederent, materia verò prædictæ laudis in vtroque casu erat grauis.*

Confessando os erros que cometi acerca dos sete pecados mortais. Quanto ao primeiro pecado mortal da soberba, contrafiz uma história de façanhas e levei-a a público duas vezes de maneira a que me parecesse um homem de vitalidade e vigor sem comparação, e assim fosse elogiado por outros. Quanto a uma vez, inventei uma história, ou melhor, disse uma mentira sem nenhum fundamento. Quanto a outra vez, ainda que se contivesse um quarto de verdade no que disse, todo o resto foi aquilo que não poderia realizar-se, pelo que acrescentei-lhe várias invenções de modo intencional e esforcei-me bastante por fazer com que a gente que ouviu a minha história a tivesse como verdadeira. Cometi um pecado bem grave através de tais práticas.

#### SEGUNDA CONFISSÃO ACERCA DO PECADO MORTAL DA «SOBERBA»

Ma ichido va canõta votoco to mixiraruru<sup>35</sup> tame ni, nen vo caqeta vonna goto vo vocaita to, mata ichiia<sup>36</sup> ni xichi fachido zzutçu<sup>37</sup> made to, miga tçuiosa vo fome aguete, iottari<sup>38</sup> no maie de catari maraxita.

いちどは、かなをどこみしためねんかをんなごとをか  
ま一度は、叶うた男と見知らるる為に、念を掛けた女事を犯いたと、また

いちやしちはちどみつよほあよつたりまへかた  
一夜に七・八度づつまでと、身が強さを褒め上げて、四人の前で語りまらし

<sup>35</sup> Mixiri [見知り], Mixiru [見知る], Mixitta [見知った]. *Conhecer*. ¶ Miuo mixiru [已を見知る]. *Conhecerse a si mesmo* (Vocabulario, f.162v).

<sup>36</sup> Ichiya [一夜]. *Modo de contar noites* (Vocabulario, f.356v).

<sup>37</sup> «zztçu» in textu.

<sup>38</sup> Yottari [四人]. *Quatro homens* (Vocabulario, f.325). Colhado, ao explicar a razão pela qual não é utilizada a expressão «Xinin», escreve: «*Interrogatio de hominibus fit per, icutari? [幾たり?] quot homines? Responso verò fit postponendo, nin [人], numeralibus chinensibus : v.g. ichi nin [一人], vnus homo, ninin [二人], duo, iottari [よつたり], vero significat quatuor: quia, xinin [しにん=死人], significat hominem mortuum*» (ARS GRAMMATICÆ IAPONIÆ LINGVÆ, p.68).



た。

別の時には、あちらの力が強い者と周囲の者に認識させるため、狙いをつけた女と不貞を働いたこと、しかも一晩に七～八度ずつまでも致したなど、いかに自分が精力絶倫であるかを、四人の前で吹聴して語りました〔己の精力絶倫を自慢する〕。

*Alia vice: vt crederer & cognoscerer vir potens, coram quatuor personis gloriatus sum, me consequutum fuisse quotquot desideraueram mulieres, & quod vna nocte septies vel octies habebam actum consumatum.*

Numa outra vez, de forma a ser reconhecido como um homem de energia incomparável, divulguei perante outras quatro pessoas, gabando-me que tinha cometido o pecado de adultério com certas mulheres que eu já tinha debaixo de olho, e afirmei que tinha copulado com cada uma delas sete ou oito vezes respectivamente, durante uma só noite.

#### TERCEIRA CONFISSÃO ACERCA DO PECADO MORTAL DA «SOBERBA»

Mata, nani nitçuqete mo<sup>39</sup>, vatacuxi va<sup>40</sup> daiichi<sup>41</sup>, mi ni curabete mireba mina no xu va nandemo nai, iacu ni tatanu to xintei ni mo vomoi, cuchi de mo vorivori<sup>42</sup> mōxi marasuru.

また、何<sup>なに</sup>につけても、私<sup>わたくし</sup>は第一<sup>だいいち</sup>、身<sup>み</sup>に比<sup>くら</sup>べてみれば皆<sup>みな</sup>の衆<sup>しゅ</sup>は何<sup>なん</sup>でもない、役<sup>やく</sup>に立<sup>た</sup>たぬと心底<sup>しんてい</sup>にも思<sup>おも</sup>ひ、口<sup>くち</sup>でも折<sup>おり</sup>々<sup>おりまう</sup>申しませうする。

また、何事につけても、私こそが一番、私に比べれば他の連中など何ほどのことはない、役にも立たぬ奴らよと心の底で思い、おりおりは口に出してそう申します〔自惚れ〕。

*Existimaui me etiam in omnibus supremum & quod in mei comparatione omnes homines nullius sint momenti: hoc vero intra me cogitaui, & aliquoties etiam verbis expressi.*

Penso no íntimo do coração e às vezes digo abertamente que sou primeiro em tudo e que todos os outros sujeitos são inúteis e insignificantes quando comparados comigo.

<sup>39</sup> «nitçuqete mo» *in textu*. Correção conforme a «Errata sic Corrige» na página 66.

<sup>40</sup> É interessante notar que não se utiliza aqui a partícula «Ga» [が] por ser «partícula de Nominatiuo falando humildemente» (*Vocabulario*, f.113v)

<sup>41</sup> Daiichi [第一]. Primeiro, ou principal. (*Vocabulario*, f.69v)

<sup>42</sup> Voriuori [折々]. Adu. De vez em quando (*Vocabulario*, f.283v).

QUARTA CONFISSÃO ACERCA DO PECADO MORTAL DA «SOBERBA»

Mi ni aru ioi coto mo, miōmon<sup>43</sup> no cocoro de naru fodo fome aguete, fito iori, ariiō no vie ni navo vomouaruru<sup>44</sup> iō ni xuju<sup>45</sup> no buriacu<sup>46</sup> uo itaxi maraxita.

身にある良いことも、名聞の心でなるほど褒め上げて、人より、有り様の  
上になほ思はるる様に種々の武略を致しました。

みずからに具わった長所を偽善と見栄から自画自讃し、自分のことを実際よりも一段優れたものと皆に思わせるよう、種々の策略をめぐらせました。

*Ex hypocrisi & vanitate cordis, quantum possum laudibus effero id quod in me boni reperitur, vt diuersis artificijs ab hominibus aestimer supra id, quod in re sum.*

Gabei-me das minhas vantagens hipocritamente e com vaidade e urdi várias invenções ardilosas de maneira a parecer-me uma pessoa melhor do que sou.

QUINTA CONFISSÃO ACERCA DO PECADO MORTAL DA «SOBERBA»

Mata, sugureta jennin to vomouaruru tame, fitono me ni /p.54/ cacaru iōni iroiro no jenguiō<sup>47</sup> vo tçutome marasuru.

また、優れた善人と思はるる為、人の目に /p.54/ 懸かる様に色々の善  
行を勤めまらする。

また人から優れて善人であると思われるため、わざと人の目につくようにいろいろの善行を致します。

<sup>43</sup> Miōmon [名聞]. i, *Hipocresia*. ¶ Miōmonni jifiuo suru [名聞に慈悲をする]. *Fazer esmola por hipocresia* (*Vocabulario*, f.161). «miō mon» in textu.

<sup>44</sup> «vomaruru» in textu.

<sup>45</sup> De acordo com Ōtsuka Mitsunobu, corrigimos «xuzu» para «xuju» (*Koryādo Sangeroku Shichū*, p.59, nota 14). Cf. Xuju [種々]. *Vt*, Xuju samazama [種々様々]. *Muitas feições, & layas* (*Vocabulario*, f.314).

<sup>46</sup> Buriacu [武略]. Buxino facaricoto [武士の謀]. *Engano, & ardil de guerra*. ¶ Buriacuu megurasu [武略を廻らす]. *Vrdir engano, ou ardil* (*Vocabulario*, f.26).

<sup>47</sup> Ienguiō [善行]. Yoqi voconai [善き行なひ]. *Bōs exercicios, ou obras virtuosas*. *Vt*, Ienguiōni vocotarū [善行に怠る]. *Faltar nos bōs exercicios, & virtudes* (*Vocabulario*, f.140).

*Præterea: vt habear homo perfectus, & excellens virtute: facio / p.55/ à consilio multa exercitia virtutis coram hominibus, vt videantur ab eis.*

Para ser tido por homem virtuoso e santo por excelência, pratico vários bons exercícios ou obras virtuosas [de propósito] de maneira a que fossem vistos por outras pessoas.

Goban ni tçuite <sup>ごばん</sup> [五番について]

Circa gulam.

Acerca da gula.

PRIMEIRA CONFISSÃO ACERCA DO PECADO MORTAL DA «GULA»

Vatacuxi<sup>48</sup> ga cugai no mono nareba, amata<sup>49</sup> no xirufito vo mochi maraxita. Sõ gozareba, aruiva sono cata ni furumai<sup>50</sup> vo uqe, aruiva miga iado

---

<sup>48</sup> Vatacuxi [私]. *Eu.* ¶ Vye, vatacuxi [上, 私]. *Senhor, & criados, ou senhor, & eu.* ¶ Vatacuxina cotouo yû [私な事を言ふ]. *Dizer cousas proprias, ou de sua opinião que não tem autoridade, nem valor em publico (Vocabulario, f.269).*

<sup>49</sup> Amata [数多]. *Muitos.* Fito amata [人数多], l, Amatano fito [数多の人]. *Muitos homens (Vocabulario, f.8).*

<sup>50</sup> Furumai [振る舞ひ]. *Conuite.* ¶ Furumaiuo suru [振る舞ひをする]. *Banquetear (Vocabulario, f.111).* Cf. Furumai [振る舞ひ], Furumö [振る舞ふ], Furumöta [振る舞うた]. *Dar conuite, ou banquetear.* ¶ Fitouo furumö [人を振る舞ふ]. *Conuidar a alguém (Vocabulario, f.111).*

ni sore vo iobiioxe<sup>51</sup>, moxiva<sup>52</sup> Niffon<sup>53</sup> catagui<sup>54</sup> ni, sacazzuqi<sup>55</sup> no jigui<sup>56</sup>  
va feizei no coto nareba, saqe<sup>57</sup> vo, l, goxu<sup>58</sup> vo taburu<sup>59</sup> xiauaxe ga xigueô  
gozatta. Sono uchi ni ichi nido nomi sugoite<sup>60</sup>, saqe ni ioi<sup>61</sup> fitatte<sup>62</sup>, nani mo

---

<sup>51</sup> Yobiyoxe [呼び寄せ], Yobiyosuru [呼び寄する], Yobiyojeta [呼び寄せた]. *Chamar a outro pera si*. (Vocabulario, f.322).

<sup>52</sup> Mesmo que a conjunção «Moxiva» não se veja no *Vocabulario da Lingoa de Iapam* nem no *Dictionarivm sive Thesavri Lingvæ Japonicæ Compendivm*, o seu sentido talvez seja idêntico ao da conjunção «Moxicuua [もしくは]. l, Xijen [自然]», a qual é definida como «*Porventura, l, ou. S*» (Vocabulario, f.168).

<sup>53</sup> Nifon [日本]. *Iapão* (Vocabulario, f.182v). Cf. Nippon [日本]. Fino moto [日の本]. *Iapão* (Vocabulario, f.183v).

<sup>54</sup> Mesmo que não se veja a expressão «Nifon catagui» no *Vocabulario da Lingoa de Iapam*, encontra-se no *Vocabulario de la Lengoa Japona*, manuscrito autógrafa de frei Colhado, «Nippon catagui» como uma frase feita, a qual é definida como «costumbres de Japon» (f.59v). Cf. Nifongui [日本紀]. *Liuro em que estão escritas as cousas de Iapão desde que se começou ate idade dos Reis, & desdos Reis ate agora*. ¶ Item [日本気]. *Custume, ou leis que correm em Iapão* (Vocabulario, f.182v). Nippongui [日本紀・日本気]. i, Nifongui [日本紀・日本気]. *Vide supra* (Vocabulario, f.183v). A expressão «Niffon catagui», escusado será dizer, é completamente idêntica ao segundo sentido do vocábulo «Niffongui» (ou «Nippongui»).

<sup>55</sup> Sacazzuqi [盃]. *Taça, ou copo*. ¶ Sacazzuquio catamuquru [盃を傾くる]. i, Sacazzuquio nomu [盃を飲む]. *Beber pello Sacazzuqi. S.* (Vocabulario, f.214v).

<sup>56</sup> Iigui [時宜]. *Oportunidade, occasiam* (Vocabulario, f.359v). Cf. Iigui [辞宜・辞儀]. *Comprimentos, ou policia*. ¶ Iiguiuo totonoyuru [辞宜(辞儀)を調ゆる]. *Fazer cumprimentos, ou cortesias*. ¶ Item, *Preparar, ou fazer aparelho destes cumprimentos, ou agasalhados*. ¶ Iiguiô [辞宜(辞儀)法]. *Leis de policia*. Iiguiôuo xiranu fito [辞宜(辞儀)法を知らぬ人]. *Homem que não sabe as leis da cortesia* (Vocabulario, f.142). No *Vocabulario* surgem dois verbetes «Iigui» como se encontram acima citados. Aqui se deve adoptar a declaração do verbete surgindo no seu *Supplemento deste Vocabulario impresso no mesmo Collegio da Cõpanhia de Iesu* no ano de 1604 (f.359v).

<sup>57</sup> Saqe [酒]. *Vinho*. ¶ Saqueo nomasuru [酒を飲まする]. *Dar de beber*. ¶ Saqueo susumuru [酒を勧むる]. *Persuadir a beber vinho*. ¶ Saqeni yô [酒に酔ふ]. *Estar tocado, ou tomado do vinho*. ¶ Saqeni chôzuru [酒に長ずる]. l, Saqeni fitaru [酒に浸る] *Estar ensopado no vinho* (Vocabulario, f.219).

<sup>58</sup> Goxu [御酒]. Von saqe [御酒]. *Vinho falando com respeito* (Vocabulario, f.122v).

<sup>59</sup> Tabe [食べ], Taburu [食ふる], Tabeta [食べた]. *Comer, ou beber* (Vocabulario, f.233v).

<sup>60</sup> Sugoxi [過ぎし], Sugosu [過ぎす], Sugoita [過ぎいた]. *Exceder. Ajuntase à raiz de muitos verbos. Vt, Nomisugosu* [飲み過ぎす]. *Beber demasiadamente*. ¶ Item, *Passar a vida annos, &c. Vt, Toxiuo sugosu* [年を過ぎす]. *Passar os annos*. ¶ Inochiuo sugosu [命を過ぎす]. *Passar a vida* (Vocabulario, f.229v).

<sup>61</sup> Yoi [酔ひ]. l, potiús. Yei [酔ひ], Yô [酔ふ], Yôta [酔うた]. *Embebedarse*. ¶ Item, *Enjoar*. ¶ Item, *Desmayar. Vt,*

voboieniu fodo, fonxô<sup>63</sup> vo cutto vxinai maraxita. Maichido va, sanomi fucô va tabenedomo, atama<sup>64</sup> ga itai<sup>65</sup>, saqe mo modoxi, qi made mo sucoxi sonjerare maraxita.

わたくし くがいのもの 数多の知る人を持ちました。さうござれば、あ  
 るいはその方に振舞ひを受け、あるいは身が宿にそれを呼び寄せ、もしは  
 日本形儀に、盃の時宜は平生のことなれば、酒を(または)御酒を食ぶる  
 仕合はせが繁うござった。その内に一・二度飲み過ぎいて、酒に酔ひ浸つ  
 て、何も覚えぬほど、本性をくっと失ひました。ま一度は、さのみ深うは食  
 べねども、頭が痛い、酒も戻し、気までも少し損ぜられました。

私は世間に少々名を知られた者でございまして、数多の知人を持つに至りました。ですから、知人のところで振る舞いを受けたり、私の家に知人を呼び寄せたり、つまり、日本の習慣に従って、酒席を設けてのつきあいは平生のことです。酒を飲む機会がまことに頻繁でございました。その内の一～二度は量を過ぎ、酒に呑まれてしまい、何の記憶もないほど思慮分別をすっかり失ってしまいました。別の機会には、さほど多量には飲みませんでしたが、頭が痛み、飲んだ酒も戻し、気分までも少し悪くなってしまいました〔過度の飲酒〕。

---

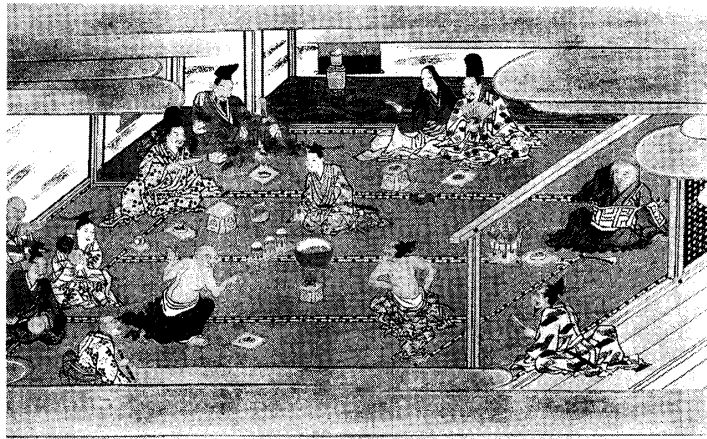
Chini yô [血に酔ふ]. *Desmayar com ver correr muito sangue.* ¶ Vmaga chiyoi suru [馬が血酔ひする]. *Desmayar o caualo com o sangue que lhe tirão.* ¶ Yuqini yô [雪に酔ふ]. *Desmayar, ou irse o lume dos olhos com ver muita neve.* ¶ Fitoni yô [人に酔ふ]. *Desmayar com a muita gente que se vê junta.* ¶ Iuoni yô [魚に酔ふ]. *Ficar como atordado com algum peixe carregado que se come. Ei sic de caeteris (Vocabulario, f.323).*

<sup>62</sup> Fitari [浸り], Fitaru [浸る], Fitatta [浸った]. *Ensoarse, ou meterse muito na agoa, ou noutra cousa liquida (Vocabulario, f.96).*

<sup>63</sup> Fonxô [本性]. *Verdadeiro juizo.* ¶ Fonxôuo vxinô [本性を失ふ]. *Perder o juizo, ou esmorecer.* ¶ Fonxôni naru [本性になる]. *Tornar em si.* ¶ *Item, Sustancia como espiritu de que se falla no Buppô (Vocabulario, f.102).*

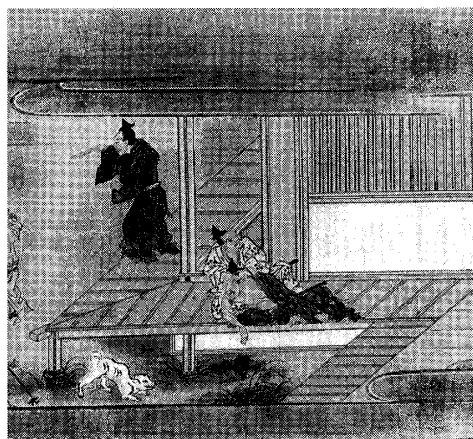
<sup>64</sup> Atama [頭]. *Cabeça. Vt, Atamaga vtçu [頭が打つ]. Doer a cabeça.* ¶ Atamauo marumuru [頭を丸むる]. *Fazerse rapado.* ¶ Atamauo faru [頭を張る], l, Atamauo coqu [頭を扱く]. *Dar cutes, ou pancadas na cabeça.* ¶ Atamauo futte iyagaru [頭を振って嫌がる]. *Dando a cabeça, recusar algũa cousa, ou dizer que não (Vocabulario, f.13v).*

<sup>65</sup> Itai [痛い]. *Cousa que doe, ou ter dor.* Itasa [痛さ]. Itô [痛う] (Vocabulario, f.135).



### 酒宴

「酒飯論絵巻」(江戸時代。茶道博物館蔵)第二段より。もろ肌脱いで踊り出す坊主の姿も。フロイス『日欧文化比較論』(1585年)にも「日本人は、食事がほとんど終わる頃まで談話をしないのに、温まってくると踊ったり歌ったりする」とある。京都文化博物館編『京都・激動の中世——帝と将軍と町衆と』(財)京都文化財団設立10周年記念特別展図録(1996年)より



### 宴会後の嘔吐

「酒飯論絵巻」第二段より。フロイス『日欧文化比較論』には「日本では、お互いにひどく無理に勧め合うので、ある者を吐かせ、ある者を前後不覚に陥らせる」とか「日本では(酩酊することが)自慢の種である」とか記される。不浄の象徴であるらしい犬が汚物を窺っている。『京都・激動の中世——帝と将軍と町衆と』より

*Cum ego sim homo satis notus habeo profecto multos amicos. cum ergo hoc ita se habeat, vel ad eorum domus ab illis inuitatus, vel eo quod ego illos ad domum meam vocem, aut denique, quia secūdū consuetudines Iaponiæ est ordinarium vini potus conuiuium, se se mihi obtulerunt multæ occasiones bibendi. inter illas verò, semel, aut bis, ita excessi, vt vino immersus totaliter iudicium, & sensum amiserim. semel vero; & si non tantū biberim; caput verò mihi dolebat, & vinum etiam euomui, cor etiam, & iudicium aliquantulum est læsum.*

Por ser um homem publicamente conhecido, tenho vários amigos. Por isso é normal não só ser convidado para o banquete de alguém mas também chamar alguém ao banquete em minha casa. De acordo com o costume japonês é tão frequente o «Sacazzuqino jigui», isto é, [o] fazermo-nos cumprimentos e cortesias por intermédio do saquê que tive muitas oportunidades de bebê-lo. Uma ou duas vezes dessas, bebi demais, fiquei «mergulhado» no saquê, e perdi totalmente o juízo até não me lembrar de nada. Numa outra ocasião, não bebi tanto, mas doeu-me tanto a cabeça que vomitei o saquê<sup>66</sup>, sentindo-me por fim um pouco mal disposto.

#### SEGUNDA CONFISSÃO ACERCA DO PECADO MORTAL DA «GULA»

Aru toqi mo, daijinaru qiacuxu ni sannin miga cata ie vogiatte<sup>67</sup>, futçuca<sup>68</sup> no aida sore<sup>69</sup> vo iocuriū<sup>70</sup> itaita tocorode, sucoxi sacana<sup>71</sup> ga atte, sacamori<sup>72</sup>

<sup>66</sup> O facto de que o acto de vomitar o saquê, para além de ser considerado como um das maiores e melhores divertimentos em ocasiões festivas, simbolizava metaforicamente a “vã abundância e riqueza” na primeira metade do século XV, o que pode ser confirmado através da descrição de vários diários de então. O autor do diário intitulado *Fekizan Nichirocu* [『碧山日録』] de nome Vnxen Taighiocu [雲泉太極] descreve frequentemente a ruim conduta dos samurais de vomitarem o saquê no regresso do «Fanami» [花見] – «*Ver flores por recreação*» (*Vocabulário da Língua de Iapam*, f.78v) – como tendo uma existência simbólica oposta àquela miserável da camada plebeia que sofria a grande fome ocorrendo nos meados do século XV (Sakurai Eiji [桜井栄治], *Nihon no Rekishi*, 12, *Muromachibito no Seishin* [『日本の歴史 第12巻 室町人の精神』], Kōdansha [講談社], 2001, pp.240-241).

<sup>67</sup> Vogiaru [おぢやり], Vogiaru [おぢやる], Vogiatte [おぢやった]. *Ir, vir, estar, &c* (*Vocabulário*, f.278).

<sup>68</sup> Futçuca [二日]. *Dous dias* (*Vocabulário*, f.353).

<sup>69</sup> Quanto ao presente pronome pessoal para a terceira pessoa, o próprio frei Colhado explica-o na sua *ARS GRAMMATICÆ IAPONIÆ LINGVÆ*: «core [これ], significat hoc, sore [それ], significat istud, are [あれ], significat illud, sed neutraliter, ita quod substantiuus, seu suppositis non iunguntur. horum pluralia sunt, corera [これら], sorera [それら], arera [あれら]» (p.15).

mo xi, mata sono qiacu voba jefitomo to xiite, tocacu iottari nagara futçucaioi<sup>73</sup> itaxi maraxita.

ある時<sup>とき</sup>も、大事<sup>だいじ</sup>なる客衆<sup>きやくしゆ</sup>二・三人<sup>さんにん</sup>身<sup>み</sup>が方<sup>かた</sup>へおぢや<sup>あひだ</sup>って、二日<sup>ふつか</sup>の間<sup>あひだ</sup>それを

抑留<sup>よくりういた</sup>致<sup>いた</sup>いたところで、少し<sup>すこ</sup>肴<sup>さかな</sup>が有<sup>あ</sup>って、酒盛<sup>さかも</sup>りもし、またその客<sup>きやく</sup>をば是非<sup>ぜひ</sup>と

もと強<sup>し</sup>ひて、とかく<sup>よったり</sup>四人<sup>ふつか</sup>ながら二日<sup>ふつか</sup>酔<sup>よ</sup>い致<sup>いた</sup>しました。



酔っ払い

「洛中洛外図」(舟木本)より。左右を支えられて五条大橋にさしかかる泥酔者。奥平俊六『洛中洛外図 舟木本——町のにぎわいが聞こえる』(小学館, 2001年)より。舟木本の景観年代の下限は、大体元和3〔1617〕年であるという

<sup>70</sup> Yocuriü [抑留]. Vosaye todomuru [抑へ留むる]. *Deter por força como a hospede, ou algũa cousa alhea* (Vocabulario, f.322v).

<sup>71</sup> Sacana [肴]. *Cousa de comer como carne, & peixe. Item, Qualquer cousa de appetite quando se come pera beber sobre ella* (Vocabulario, ff.214-214v).

<sup>72</sup> Sacamori [酒盛り]. *Folguedo de muitos ôde ha muito beber.* ¶ *Sacamoriuo suru* [酒盛りをする]. *Fazer beberetes, ou folguedos onde hà muito beber* (Vocabulario, f.214).

<sup>73</sup> Sendo uma palavra muito usada ainda hoje, é o substantivo conjunto composto de «Futçuca» – «Dous dias» (Vocabulario, f.353) – e «Yoi» – «Bebedice, ou enjoamento. Vi, Yoiga samuru [酔ひが醒むる]. Acabar de cozer o vinho» (Vocabulario, f.323) –. Sakurai Eiji [桜井栄治] presume que a palavra «Futçucayoi» aparece pela primeira vez no diário intitulado «Mansaijugō nicki» [『満濟准后日記』] datado a 27 de Dezembro de 1416, no qual se menciona que o quarto xogun de Muromachi de nome Axicaga Yoximochi [足利義持], o qual morreria mais tarde durante um «folguedo de muitos ôde ha muito beber», adquiriu este sentido (*Muromachibito no Seishin*, p.238).



あるとき、大事な客人が二～三人私の家へ来まして、二日間これを無理に引き留めましたが、その際、少しばかり肴がありましたので酒盛りを致し、また客人には是非飲むようにと強要して、私も客人も四人ともども二日酔いを致してしまいました。

*Alio etiam tempore, cum ad me venissent duo vel tres hospites graues, per duos dies illos detinui: cumque aliquid obsonij haberem, duorum dierum conuiuuium illis exhibui, sicque illos ad bibendum prouocauit, vt quatuor simul, illis diebus fuerimus ebrij.*

Numa ocasião dois ou três hóspedes meus, importantes, vieram a minha casa e retive-os nela, à força, por dois dias. Por haver um pouco de «Sacana», isto é, acompanhamento do saquê, demos uma festança e obriguei-os a beber, apanhámos por fim todos nós quatro uma valente carraspana, que durou dois dias.

#### TERCEIRA CONFISSÃO ACERCA DO PECADO MORTAL DA «GULA»

Mata: quaresma ni, ichido, xiqi<sup>74</sup> no jejun ni mo ichido gentio no cata ni vori marasureba, sono teixu<sup>75</sup> vo xōban<sup>76</sup> xite nicujiqi<sup>77</sup> vo itaxi maraxita.

また、クワレズマに<sup>いちど</sup>一度、<sup>しき</sup>四季のゼジュンにも<sup>いちど</sup>一度、<sup>かた</sup>ゼンチョの方に<sup>を</sup>居りま  
らすれば、その<sup>ていしゅ</sup>亭主を<sup>しやうばん</sup>相伴して<sup>にくじき</sup>肉食を<sup>いた</sup>致しました。

また、クワレズマに一度、四季のゼジュン、つまり春夏秋冬の大齋に一度、ゼンチョの家におりましたこともあって、その亭主に相伴して肉食を致しました。

*Cum contigisset me esse in domo gentilium, tempore quatuor temporum, semel cum domino hospitij carnes comedi; semel etiam in quadragesima.*

Mais: uma vez durante a quaresma e uma outra vez durante um dos jejuns obrigatórios em quatro estações, ao permanecer na casa de um gentio, cometi o pecado de comer carne, acompanhando o dono da casa.

<sup>74</sup> Xiqi [四季]. Yotçuno toqi [四つの季]. i, Faru [春], natçu [夏], aqi [秋], fuyu [冬]. *Quatro tempos do anno* (Vocabulario, f.305).

<sup>75</sup> Teixu [亭主]. i, Iyeno nuxi [家の主]. *Senhor da casa* (Vocabulario, f.253v).

<sup>76</sup> Xōban [相伴]. Aitomonō [相伴ふ]. *O fazer companhia na mesa, ou no comer.* ¶ Fitoni xōban suru [人に相伴する]. *Acompanhar a alguém no comer, ou comer com alguém* (Vocabulario, f.309).

<sup>77</sup> Nicujiqi [肉食]. *O comer cousa de carne* ¶ Nicujiqiuo yamuru [肉食を止むる]. *Deixar de comer carne* (Vocabulario, f.182v).

QUARTA CONFISSÃO ACERCA DO PECADO MORTAL DA «GULA»

Sono uie, ni sando, canai nagara Sancta Iglesia no ichijiqi<sup>78</sup> jejun to mösu vo iaburi<sup>79</sup> maraxita.

その上、二・三度、叶ひながら、サンタエケレジアの一食ゼジュンと申す  
を破りまらした。

そのうえ、二～三度、守ろうと思えばそうできたにもかかわらず、サンタ・イゲレンシアつまり聖なる教会の定めた「一食ゼジュン」(一日一食だけをとることが許された潔斎日)と申す規則を破ってしまいました。

*Præter hoc: cum alias possem ieiunare, bis vel ter fregi ieiunium ecclesiasticum.*

Para além disso: duas ou três vezes quebrei a lei daquilo que se chama «Ichijiki jejum» ordenada pela Santa Igreja, isto é, jejum no qual se come só uma vez, apesar de ser possível guardá-lo se tivesse tido a vontade<sup>80</sup>.

<sup>78</sup> Ichijiqi [一食]. Fitotabi xocusu [一度食す]. *Iejum no qual se come hũa soo vez. Vi, Ichijiquio suru [一食をする]. Iejuar comendo hũa soo vez no dia (Vocabulario, f.128v).*

<sup>79</sup> Yaburi [破り], Yaburu [破る], Yabutta [破った]. *Romper. ¶ Item, Destruir. ¶ Fattouo yaburu [法度を破る]. Quebrar a ley (Vocabulario, ff.315v-316).*

<sup>80</sup> «¶ Ho christião depois de vinte e huï anos he obriguado a jejûar todos jejûs como e quando mãda a Ygreja, scilicet, comendo pescado em a Quoresma, em os outros jejûs gardar o custume acerca dos ovos e cousas de leyte, comerá huïa vez e acerca do meyo dia. A necessidade escusa o jejuï, scilicet, doença, velhice, trabalho, enprehidõe, dar leyte, pedir de porta em porta, caminhar quando boamente nam se pode guardar o jejû, porque a Ygreja assi quer refrear e domar o corpo pello jejuï, que nam quer sua morte ou doença. E, pera estas necessidades te excusar seguramente, debes pedir licença ao prelado, como arriba foe dicto, em a guarda das festas» [日埜意訳——キリシタンは21歳になったらエケレジア[教会]の命ずるように、そしてエケレジアの命ずるときに、あらゆるゼジュン[カトリック的理由にもとづく潔斎]を果たす義務を有する。クワレズマ[四旬節]には(獣肉を避けて)ペスカード[白身の魚]を食べること、その他のゼジュンにあつては卵や乳製品に関する慣習を守ること、食事は一日一度だけ正午頃にとること、がその内容である。ただしやむを得ぬ事情がある者はゼジュンの義務を免れる。たとえば、病気、老齡、労働、妊娠、授乳のためゼジュンの義務が果たせぬ者、食を乞うて戸口から戸口へと渡り歩く者、旅路にあつて善意からゼジュンの決まりを守れぬ者。エケレジアはゼジュンにより肉体(の放埒)を抑制し馴致することを望むだけであつて、肉体の死や病気を望むものではないからだ。上述のようなやむを得ざる事情があり安心してゼジュンを免れたいと思うなら、汝は、潔斎日を汚さぬという念いを胸に秘めつつ高位聖職者の許しを求めねばならない] (*O Cathecismo Pequeno de D. Diogo Ortiz*, p.185).

QUINTA CONFISSÃO ACERCA DO PECADO MORTAL DA «GULA»

Mata, vonjiqui<sup>81</sup> tamen<sup>82</sup> no chüyô<sup>83</sup> vo tamochi maraxeide, sore nitçuqete saisai sucoxi zzutçu sugoxi<sup>84</sup> maraxita.

また、<sup>おんじき</sup>飲食・<sup>ためん</sup>打眠の<sup>ちゅうよう</sup>中庸を<sup>たも</sup>保ちませいで、それにつけて<sup>さいさいすこ</sup>細々少しづつ

<sup>す</sup>過ぎしました。

また、ほどよく飲んだり食べたり眠ったりすることを守らず、それぞれについて再々少しづつ過ぎすところがございました。

*Circa temperantiam etiam cibi potus, & somnij, illam non habui; quin potius sæpe in parua materia excessi.*

Não guardando a temperança e a boa medida em comer, beber e dormir, excedi-me de vez em quando um pouco nisso.

Xitto sonemi ni tçuite [嫉妬・嫉みにこつて]. [Rocuban ni tçuite

[六番について].]

Circa inuidiam.

Acerca do ciúme.

---

<sup>81</sup> Vonjiqui [飲食]. Nomimono, cuimono [飲み物, 食ひ物]. *Beber, & comer.* ¶ Vonjiquini tonzuru [飲食に食ずる]. *Darse a comer, & beber* (Vocabulario, f.282).

<sup>82</sup> Vonjiqui tamen [飲食打眠]. *Beber, comer, & dormir* (Vocabulario, f.282).

<sup>83</sup> Chüyô [中庸]. *Meo, ou mediocridade nas cousas. Vi, Banji chüyôuo mamore* [万事中庸を守れ]. *Em tudo guardai o meo, ou em tudo sede temperado.* ¶ *Item, Nome de hum liuro da China que trata desta temperança, & mediocridade* (Vocabulario, f.52). No *Dictionarivm sive Thesavri Lingvae Iaponicae Compendivm* se define a presente palavra de várias maneiras, por exemplo, como «*In cibo & potu esse temperatum. Guardar templança en la comida y beuida.* Vonjiqui no chüyô uo mamori, u [飲食の中庸を守り(る)]» (p.104); «*Moderatus. Moderado que guarda medio templado.* Chüyô uo mamoru [中庸を守る], *vel. (Chüyô uo) tamotçu [(中庸を)保つ]*» (p.280); «*Parcus, i, templado, moderado.* Chüyô [Chüyô *in textu*] no [中庸]: chüyô vo tamotçu [中庸を保つ]» (p.297), etc. «tçuiô» *in textu.*

<sup>84</sup> Sugoxi [過ぎし], Sugosu [過ぎす], Sugoita [過ぎいた]. *Exceder. Ajuntase à raiz de muitos verbos. Vi, Nomisugosu* [飲み過ぎす]. *Beber demasiadamente.* ¶ *Item, Passar a vida annos, &c. Vi, Toxiu sugosu* [年を過ぎす]. *Passar os annos.* ¶ *Inochiu sugosu* [命を過ぎす]. *Passar a vida* (Vocabulario, f.229v).

UMA CONFISSÃO ACERCA DO PECADO MORTAL DO «CIÚME»

p.56/ Varera<sup>85</sup> xiqi<sup>86</sup> no mono no fũ<sup>87</sup> ga iôte, iuzzuri carecore<sup>88</sup>, nivacani fucujin<sup>89</sup> ni narareta vo mite, sateva miga coto no uie bacari ni fu ga

---

<sup>85</sup> Varera [我等]. *Nos, ou eu* (*Vocabulario*, f.268).

<sup>86</sup> Xiqi [しき]. *Hũa particula que se ajunta a algũs pronomes como Varera [我等], & Xexxa [拙者]. i, Eu, falãdo baixamente de si como quem dis[s]esse, hum tal como eu, &c. Vt, Varera xiqi [我等しき]. ¶ Core xiqi [これしき]. Estas cousas, ou desta laya* (*Vocabulario*, f.305).

<sup>87</sup> Ôtsuka Mitsunobu lê a presente palavra como «Fu» (*Koryãdo Sangeroku Shichũ*, pp.56, 101). Não se sabe se se deveria manter a grafia original. Cf. Fu [符]. *Dita, ou fortuna*. ¶ Funo yoi fito [符の良い人], l, Funo varui fito [符の悪い人]. *Homem ditoso, ou mal afortunado* (*Vocabulario*, f.104v).

<sup>88</sup> «care core» *in textu*. Carecore [かれこれ]. *Hũa coisa, & outra, isto, & aquillo, &c* (*Vocabulario*, f.40v).

<sup>89</sup> Fucujin [福人]. i, Tomeru fito [富める人]. *Rico, ou prospero* (*Vocabulario*, f.105v).

varuiga qiocunai<sup>90</sup> to zonjite, qi<sup>91</sup> ga tçumatte<sup>92</sup>, fucõ canaximi<sup>93</sup>, ta<sup>94</sup> no<sup>95</sup>  
tacara<sup>96</sup> voba sonemi maraxita.

<sup>90</sup> Qiocumo nai [曲もない]. *Palavra com que principalmente se hum queixa dalguem por não lhe fazer o que deuia.* *Vi*, Qiocumo nai cotouo suru [曲もない事をする]. *Fazer cousas que não diueram fazerse (Vocabulario, f.197v).* Cf. Iniuicundus, a, um. Lus. Couse não deleitosa, ou triste. Iap. Qini auazaru coto [気に合はざる事], qiocumo naqi coto [曲も無き事], vtateqi coto [うたてき事] (*DICTIONARIVM LATINO LVSITANICVM, AC IAPONICVM EX AMBROSII CALEPINI volumine depromptum: in quo omissis nominibus proprijs tam locorum, quàm hominum, ac quibusdam alijs minùs vsitatis, omnes vocabulorũ significationes, elegantioresq; dicendi modi apponuntur: in vsum, & gratiam Iaponicæ iuuentutis, quæ Latino idiomati operam nauat, nec non Europeorũ, qui Iaponicũ sermonem addiscunt.* Amacusa, 1595, p.376).

<sup>91</sup> Qi [気]. *Coração, espiritos vitales, ou vigor do coração.* ¶ Qiga sanzuru [気が散ずる], I, Qiuo sanzuru [気を散ずる]. *Desabafar o coração.* ¶ Qiga tçucaruru [気が疲る]. *Estar muito cansado, & abafado do coração.* ¶ Qiga tçumaru [気が詰まる]. *Idem.* ¶ Qiga tçuqu [気が付く]. *Tornar em si o que esmoreceo.* ¶ Qiga tçuquru [気が尽くる]. *Estar muito debilitado, & exhausto das forças interiores.* ¶ Qini ataru [気に当たる]. *Dar no coração.* ¶ Qini cacaru [気に懸かる]. *Fazer escrupulo, ou tocar no coração.* ¶ Fitono qiuo nadamuru [人の気を宥むる]. *Consolar a alguem.* ¶ Qiuo yauaraguru [気を和らぐる]. *Abrandar o coração.* ¶ Qiuo nomu [気を呑む]. *Afligirse muito, ou estar atribulado.* ¶ Qiuo vxinõ [気を失ふ]. *Esmorecer.* ¶ *Item, Perder o animo.* ¶ Qiuo vru [気を得る]. *Tomar alento (Vocabulario, f.194).*

<sup>92</sup> Tçumari [詰まり], Tçumaru [詰まる], Tçumatta [詰まった]. *Estar, ou ser muito apertado.* ¶ Fanaga tçumaru [鼻が詰まる]. *Ter os narizes apertados, & entupidos como com cadarram, &c.* ¶ Cutçuga tçumaru [靴が詰まる]. *Ser o calçado apertado.* ¶ Cotobani tçumaru [言葉に詰まる]. *Ficar concluido cõ palauras.* ¶ Rini tçumaru [理に詰まる]. *Ser conuencido da razão.* ¶ Cate, fiõrõni tçumaru [糧, 兵糧に詰まる]. *Faltarem os mantimentos.* ¶ Qiga tçumaru [気が詰まる]. *Estar afrontado, ou abafado do coração.* ¶ Riga tçumaru [痢が詰まる]. *Não poder fazer camara (Vocabulario, f.247v).*

<sup>93</sup> Canaximi [悲しみ], Canaximu [悲しむ], Canaxũda [悲しうだ]. *Entristecerse (Vocabulario, f.35v).* Cf. Canaxigueni [悲しげに]. *Adu. Com tristeza, ou tristemente (Vocabulario, f.35v).* Canaxij [悲しい]. *Cousa triste.* Canaxisa [悲しさ]. Canaxũ [悲しう] (*Vocabulario, f.35v*). Canaximi [悲しみ]. *Tristeza.* ¶ Canaximiuo caquru [悲しみを懸くる]. *Dar tristeza.* ¶ Canaximiuo moyouosu [悲しみを催す]. *Entristecerse muito.* ¶ Canaximi qimoni meizuru [悲しみ肝に銘ずる]. *Penetrar a tristeza muito a alguem.* ¶ Canaximi mini amaru [悲しみ身に余る]. *Ter grandissima tristeza (Vocabulario, f.35v).*

<sup>94</sup> Ta [他]. Bechi [別]. *Outro, ou outra, ou outra cousa (Vocabulario, f.233).*

<sup>95</sup> Tano [他の]. *Adj. Vi, Tano fito [他の人]. Outro homem (Vocabulario, f.233).*

<sup>96</sup> Tacara [財・宝]. *Riqueza, ou fazenda.* ¶ Tacarauo tçuyasu [財を費す]. *Esperdiçar a fazenda.* ¶ *Item, Couse de preço, & estima (Vocabulario, f.234).*

p.56/我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>し<sup>もの</sup>き<sup>ふ</sup>の<sup>よ</sup>者<sup>ゆづ</sup>の<sup>にはか</sup>符<sup>ふくじん</sup>が<sup>よ</sup>良<sup>う</sup>う<sup>て</sup>て、<sup>ゆづ</sup>譲<sup>り</sup>か<sup>れ</sup>こ<sup>れ</sup>、<sup>にはか</sup>俄<sup>に</sup>に<sup>ふくじん</sup>福<sup>人</sup>に<sup>な</sup>ら<sup>れ</sup>た<sup>を</sup>を  
 見<sup>み</sup>て、<sup>み</sup>さて<sup>は</sup>身<sup>み</sup>が<sup>こと</sup>の<sup>うへ</sup>上<sup>ば</sup>か<sup>り</sup>に<sup>ふ</sup>符<sup>わ</sup>が<sup>わる</sup>悪<sup>い</sup>が、<sup>きよ</sup>曲<sup>な</sup>い<sup>と</sup>と<sup>ぞん</sup>存<sup>じ</sup>て、<sup>き</sup>気<sup>つ</sup>が<sup>詰</sup>ま  
 つ<sup>て</sup>、<sup>ふか</sup>深<sup>かな</sup>う<sup>た</sup>悲<sup>た</sup>しみ、<sup>た</sup>他<sup>た</sup>の<sup>た</sup>財<sup>から</sup>を<sup>そ</sup>ば<sup>ね</sup>嫉<sup>み</sup>ま<sup>ら</sup>し<sup>た</sup>。

私と比べても大差ないようなつまらぬ者が、運良く、遺産や他のあれこれによって、俄かに金持ちになつたを見て、さてさて、わが身の上ばかりどうしてこううまくゆかぬのであろう、恨めしいと存じまして、心塞がり、深い悲しみに襲われ、他人の財宝に嫉妬心を抱きました。

p.57/ *Videns homines in qualitate mihi similes, ex eorum bona fortuna, vel ob hæreditatem aliquam, aut ex alijs repente diuites factos esse, non valensque substinere, meã tantum malam esse fortunam: corde oppressus, & valde contristatus habui inuidiam de diuitijs alienis.*

Vendo que um homem tão humilde como eu teve sorte de tornar-se rico de repente graças à herança e a outros motivos, perguntei-me a mim mesmo, com grande mágoa e tristeza, porque tudo me corria mal e tive por fim ciúmes da sua riqueza.

[Nibano ni tçuite [二番について].]

[Circa avaritiam.]

[Acerca da avareza.]

#### UMA CONFISSÃO ACERCA DO PECADO MORTAL DA «AVAREZA»

Sono foca, aru fito no cuji<sup>97</sup> nitçuite, mi va sono fiiqi<sup>98</sup> xite, catçu fodo cõreacu<sup>99</sup> itasõ to iacusocu xitareba, zuibun sore ni nen vo ire, narufodo

<sup>97</sup> Cuji [公事]. *Demanda. Vi, Cujiuo sabaqu* [公事を裁く]. *Tratar a demanda. ¶ Cujiuo caququ* [公事を掛くる]. *Pòr demanda (Vocabulario, f.64v).*

<sup>98</sup> Fijqi [最眞]. *O fazer as parte dalguem, ou procurar por elle. Vi, Fitono fijqiuo suru* [人の最眞をする] (*Vocabulario, f.91*).

<sup>99</sup> «coreocu» *in textu*. Cf. Cõriocu [合力]. *Chicarauo auasuru* [力を合わする]. *Aiuda (Vocabulario, f.58v).*

fataraita redomo, sono cuji vo xi tadasu<sup>100</sup> aida ni quabun<sup>101</sup> no vairo<sup>102</sup>, vel, maito<sup>103</sup> vo tori maraxita<sup>104</sup>.

その外、ある人の公事について、身はその最負して、勝つほど合力致さ  
うと約束したれば、随分それに念を入れ、なるほど働いたれども、その公事  
をし糺す間に過分の賄賂、(または)まいとを取りました。

そのほか、ある人の訴訟沙汰について、私はその人に最負、すなわち肩入れし、勝訴するまで大いに助力しようと約束しました。その手前、私としても随分そのことには念を入れできる限り働きましたけれども、その是非を決めるまでの間、すなわち裁判が進行している間、過分のまいと、つまり賄賂を取りましてございます。

*Præterea: cum ego causam cuiusdam hominis, & litem suscepissem, vt eius partes agerem, & promissem, me vsque ad victoriam illum adiuturum; etiam si accurate, & diligenter quantum potui, laborauerim, antequam eius causa iudicaretur, dum erat in litigatione, valide me subornauit.*

Além disso: por ocasião de uma acção judicial levantada por um homem,

<sup>100</sup> Tadaxi [糺し・正し], Tadasu [糺す・正す], Tadaita [糺いた・正いた]. *Inquirir, & Julgar*. ¶ Sugimeuo tadasu [筋目を糺す]. *Buscar o fio, ou linha que está embaraçada, & pola em seu lugar*. ¶ *Item, per met. Inquirir a geração, ou linhagem dalguem (Vocabulario, f.236)*. «xii tadasu» in textu. Correção conforme a «Errata sic Corrige» na página 66. «Xitadasu» [し糺す] é o verbo conjunto composto por dois verbos «Xi» [し] – raiz do verbo «Suru» [する] – e «Tadasu» [糺す].

<sup>101</sup> Quabun [過分]. Bunni suguru [分に過ぐる]. *Abundancia, ou copia (Vocabulario, f.203)*. Quabunna [過分な]. *Cousa abundante, ou muita*. ¶ *Item, per met. Palavra de agradecer, & ter em muito (Vocabulario, f.203)*. A forma adjectivada «Quabunna» [過分の] é idêntica a «Quabunna». Cf. Quabunni [過分に]. *Adu. Abundamente, ou muito*. ¶ Quabunni zonzuru [過分に存ずる]. *Agradecer, ou estimar em muito (Vocabulario, f.203)*.

<sup>102</sup> Vairo [賄賂]. Mainai [まいなひ]. *Peitas, ou soborno*. ¶ Vairouo toru [賄賂を取る]. *Tomar peitas*. ¶ Vaironi fuqeru [賄賂に耽る]. I, Vaironi mezzuru [賄賂に愛づる]. *Ser sobornado, ou leuado das peitas*. ¶ Vaironi yotte ficujiuo rinisuru [賄賂によって非公事を利にする]. *Por peitas, ou interesse justificar a demanda injusta (Vocabulario, f.267)*.

<sup>103</sup> No *Vocabulario da Lingoa de Iapam* não aparece o substantivo «Maito», o qual é definido por frei Colhado como «Subornatio. Cohechos, sobornos. Vairo [賄賂], vel maito [まいと]» no *Dictionarivm sive Thesavri Lingvæ Iaponicæ Compendivm* (p.129).

<sup>104</sup> Parece que existe uma confusão relativamente à colocação desta confissão. Ainda que não se esclareça a qual pecado mortal pertence a presente confissão, julgo para já que deveria ser relacionada com o pecado mortal da «avareza».

prometi que favorecê-lo-ia e lhe prestaria a maior ajuda possível até que ganhasse a sua causa, pelo que trabalhei bastante para o seu benefício e lhe aceitei muitos subornos durante todo o processo.

Iifi no xosa ni taixite [慈悲の所作に対して].

Circa opera misericordiæ.

Acerca da obra de misericórdia.

#### PRIMEIRA CONFISSÃO ACERCA DA OBRA DE MISERICÓRDIA

Vatacuxi, teppô<sup>105</sup> gusuri<sup>106</sup> vo tçucuru mono de gozareba, Holanda no herejes caizocu<sup>107</sup> nin<sup>108</sup> ni sono cusuri vo vri, sono vie fiörö<sup>109</sup> teppô sono tama<sup>110</sup>, ixibiia<sup>111</sup>, caixen<sup>112</sup> no dögu<sup>113</sup> vo mo mina tazzune idaxi<sup>114</sup>, sono

---

<sup>105</sup> Teppô [鉄炮]. *Espingarda (Vocabulario, f.255v)*. Talvez seja mais correcta a forma «Teppô» [てっぽう] como é evidente na descrição do dicionário chinês-japonês compilado e editado pela Companhia de Jesus no Japão intitulado *RACVYOXV* [『落葉集』] (1598), mas penso melhor manter a grafia original, considerando se encontrarem vistos, para além do sobredito «Teppô», os seguintes verbetes no *Vocabulario da Lingoa de Iapam*: «Teppôno dai» [鉄炮の台] (f.255v) e «Teppôzucume» [鉄炮ずくめ] (f.255v).

<sup>106</sup> Uma palavra composta de dois vocábulos «Teppô» [鉄炮] e «Cusuri» [薬]. «Cusuri» quer dizer «*Poluora*» neste contexto (*Vocabulario, f.68*).

<sup>107</sup> Caizocu [海賊]. *Vmino nusubito* [海の盗人]. *Cosairo, ou pirata (Vocabulario, f.34)*.

<sup>108</sup> «Cai zogunin» *in textu*. Correção conforme a «Errata sic Corrige» na página 66.

<sup>109</sup> Fiörö [兵糧], I, Feörö [兵糧]. *Tçuuamonono cate* [兵の糧]. *Mantimento dos soldados*. ¶ *Fiöröni tçumaru* [兵糧に詰まる]. *Faltarem os mantimentos*. ¶ *Fiöröuo comuru* [兵糧を籠むる]. *Meter mantimentos, ou vitualhas na fortaleza (Vocabulario, f.92)*. «fiörö» *in textu*.

<sup>110</sup> Tama [玉]. *Pilouro, ou bola*. ¶ *Qinno tama* [金の玉]. *Grãos dos testiculos (Vocabulario, f.238v)*.

<sup>111</sup> Ixibiya [石火矢]. *Bombarda, ou outra peça dartelharia (Vocabulario, f.137)*.

<sup>112</sup> O substantivo «Caixen», que não se regista no *Vocabulario da Lingoa de Iapam*, é definido por frei Colhado como «*Classicum bellum. Guerra o batalla naual*. *Caixen* [海戦]» (*Dictionarivm sive Thesavri Lingvæ Iaponicæ Compendivm, p.185*).

<sup>113</sup> Dögu [道具]. *Aparelhos, ou instrumentos, & petrechos (Vocabulario, f.73)*.

<sup>114</sup> *Tazzunedaxi* [尋ね出し], *Tazzunedasu* [尋ね出す], *Tazzunedaita* [尋ね出した]. *Buscando descobrir a cousa, ou dar com ella, ou achalla (Vocabulario, f.244)*. *Tazzuneidaxi* [尋ね出だし], *Tazzuneidasu* [尋ね出だす], *Tazzuneidaita*



tameni cai maraxite gozaru. Tocacu arera va corobi Christian to, mata caizocu no mono nareba, sadamete saiōni<sup>115</sup> mōxita coto vo vri tçuzzucuru<sup>116</sup> ga von imaxime de gozarō to, suisat<sup>117</sup> itaxi nagara, ionen no aida ni xi tçuzzuqi maraxita.

わたくし てっぽうぐすり つく もの かいぞくにん くすり  
私, 鉄砲薬を作る者でござれば, オランダのエレゼス海賊人にその薬  
う うへ ひやうらう てっぽう たま いし び や かいせん だう ぐ みなたづ いだ  
を売り, その上, 兵糧・鉄砲・その玉・石火矢, 海戦の道具をも皆尋ね出し,  
その為<sup>ため</sup>に<sup>か</sup>買ひ<sup>ら</sup>ま<sup>ら</sup>して<sup>こ</sup>ら<sup>る</sup>。と<sup>か</sup>く<sup>こ</sup>あ<sup>ら</sup>れ<sup>こ</sup>等<sup>ら</sup>は<sup>こ</sup>ら<sup>る</sup>び<sup>こ</sup>キ<sup>こ</sup>リ<sup>こ</sup>シ<sup>こ</sup>タ<sup>こ</sup>ンと, <sup>かいぞく</sup>また<sup>く</sup>海<sup>く</sup>賊<sup>く</sup>の  
もの <sup>さだ</sup>者<sup>さ</sup>な<sup>さ</sup>れ<sup>ま</sup>ば, <sup>さ</sup>定<sup>ま</sup>め<sup>ま</sup>て<sup>ま</sup>左<sup>ま</sup>様<sup>ま</sup>に<sup>ま</sup>申<sup>ま</sup>した<sup>ま</sup>こと<sup>ま</sup>を<sup>ま</sup>売<sup>ま</sup>り<sup>ま</sup>続<sup>ま</sup>け<sup>ま</sup>る<sup>ま</sup>が<sup>ま</sup>御<sup>ま</sup>禁<sup>ま</sup>め<sup>ま</sup>で<sup>ま</sup>ご<sup>ま</sup>ざ<sup>ま</sup>ら<sup>ま</sup>う<sup>ま</sup>と<sup>ま</sup>推<sup>ま</sup>察<sup>ま</sup>  
いた  
致<sup>いた</sup>し<sup>いた</sup>な<sup>いた</sup>が<sup>いた</sup>ら, <sup>よ</sup>四<sup>ねん</sup>年<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>間<sup>ひだ</sup>に<sup>つづ</sup>し<sup>つづ</sup>き<sup>つづ</sup>ま<sup>ら</sup>した<sup>つづ</sup>。

私, 鉄砲薬を作る者でございますが, オランダのエレゼス, すなわち異教徒のオランダの海賊にその薬を売り, そのうえ, 兵糧・鉄砲・その玉・石火矢や, 海戦の道具をすべて探し求め, オランダの海賊に売り払うため買い入れましてございます。何と申しましても, あの連中は転びキリシタンであり, しかも海賊をなりわいとする者どもでもありますれば, そうした連中に上述のものを売り続けることは, 定めて御戒めに当たるであろうとは推察しつつ, 四年間さよう致し続けました。

*Ego puluerem tormentarium conficio: cum ergo ita sit: hæreticis & pyratis Holandis vendidi huiusmodi puluerem; illis etiam ministravi quærendo victu alia, sclopos, & glandes seu globos tormentarios, & tormenta & alia instrumenta bellica. cum vero illi sint, tum hæretici, tum pyratis determinate huiusmodi prædicta vendere, & in his illis adiuuare & ministrare esse in lege Dei prohibitum credens, per quatuor annos continuos illud exercui.*

Sou fabricante da pólvora para espingardas e continuei a vendê-la aos

[尋ね出だいた]. *Idem* (Vocabulario, f.244).

<sup>115</sup> Sayōna [左様な]. 1, Sayōno [左様の]. *Adiect. Cousa tal, ou semelhante* (Vocabulario, f.222v). Sayōni [左様に]. *Adu. Assi, ou dessa maneira* (Vocabulario, f.222v).

<sup>116</sup> Tçuzzuqe [続け], Tçuzzuquru [続ける], Tçuzzuqeta [続けた]. *Fazer ir continuando, ou continuar algũa cousa. Vi, Cateuo tçuzzuquru* [糧を続ける]. *Continuar com os mantimentos* (Vocabulario, f.252). «vri tçuzu suru» in *textu*. Ōtsuka Mitsunobu afirma que «vri tçuzzuquru» – em vez de «vri tçuzzucuru» – é correcto e adequado por ser um verbo composto de dois verbos «Vru» [売る] e «Tçuzzuquru» [続ける] (cf. *Koryādo Sangeroku Shichū*, p.61, nota 9).

<sup>117</sup> Suisat [推察]. Voxi miru [推し見る]. *Conjeitura. Vi, Suisat suru* [推察する] (Vocabulario, f.230v).

piratas hereges da Holanda. Para além disso, busquei e arranjei os mantimentos dos soldados, as espingardas, os pelouros ou bolas, as peças de artilharia, os aparelhos e os apetrechos para a batalha naval, comprando todos estes para vendê-los aos piratas holandeses. De qualquer maneira, aqueles sujeitos, para além de serem cristãos «caídos» – apóstatas –, são aqueles que vivem da pirataria, e, mesmo conjecturando que o acto de continuar a vender-lhes as sobreditas mercadorias infringiria a proibição eclesiástica, continuei a fazê-lo por quatro anos.

#### SEGUNDA CONFISSÃO ACERCA DA OBRA DE MISERICÓRDIA

Mata, ima no faiaru Christian no samatague nitçuite, mi ga atari ie buguiõ ga qite, gaibun<sup>118</sup> Christian xu ni padre tachi ni iado vo caxi, sore ni auare mai to no fan<sup>119</sup> vo suie, mata core vo navo catõ<sup>120</sup> sadamuru tame ni xeimon no iacusocu vo saxeraruru tocoroni, vare mo sono iacusocu vo xi, tonari no mono ni mo dôjen<sup>121</sup> no iqen o<sup>122</sup> cuvaie maraxita.

また、<sup>いま</sup>今のはやるキリシタンの<sup>さまた</sup>妨げについて、<sup>み</sup>身があたりへ<sup>ぶぎやう</sup>奉行が来て、  
<sup>がいぶん</sup>涯分キリシタン衆に<sup>しゅ</sup>パテレ<sup>たち</sup>達に<sup>やど</sup>宿を<sup>か</sup>貸し、<sup>あ</sup>それに<sup>はん</sup>逢はれまいとの<sup>す</sup>判を<sup>す</sup>据ゑ、  
 またこれをなほ<sup>かた</sup>堅う<sup>さだ</sup>定むる<sup>ため</sup>為に<sup>せいもん</sup>誓文の<sup>やくそく</sup>約束をさせらるるところに、<sup>われ</sup>我もその  
<sup>やくそく</sup>約束をし、<sup>とな</sup>隣の<sup>もの</sup>者にも<sup>どうぜん</sup>同前の<sup>いけん</sup>異見を<sup>くは</sup>加へました。

また、現今盛んに行なわれているキリシタンの迫害について、私の身边にも奉行が参りまして、キリシタン衆に向け、くれぐれもパテレたちには宿を貸さぬように、彼らとは決して逢わぬようにとの一札を

<sup>118</sup> Gaibun [涯分]. *Adu. i, Zuibun* [隨分]. *Com cuidado, & diligencia* (Vocabulario, f.114).

<sup>119</sup> Fan [判]. *Sinal de cartas, &c.* ¶ *Fanuo suyuru* [判を据ゆる]. *Por seu sinal, ou assinarse* (Vocabulario, f.78).

<sup>120</sup> Catai [固い・堅い]. *Cousa dura*. *Catasa* [固さ・堅さ]. *Catõ* [固う・堅う] (Vocabulario, f.42).

<sup>121</sup> Dôjen [同前], l, Dôjenni [同前に]. *Da mesma maneira* (Vocabulario, f.73).

<sup>122</sup> Trata-se da ligação muito peculiar às obras de frei Colhado, acerca da qual se vê a explicação já citada do nosso frei dominicano na sua *ARS GRAMMATICÆ LAPONIAE LINGVÆ* (p.63). Não se sabe se se deveria corrigir para uma forma mais normal «iqen vo», ou para «iqenno» de acordo com a descrição já citada do padre João Rodriguez Tçuzzu na sua *Arte da Lingoa de Iapam* (f.177v).

取られ、かつ、このことを堅く定めおくために誓文をもって約束するよう迫って参りましたため、私はついにその旨を約束し、隣りの者にも同じことをするよう勧めました。

*Præterea: cum circa feruentem modo Christianorum persecutionem, venisset ad nos quidam minister, faceretque magnas diligentias, vt subscriberent oens, se religiosos non esse recepturos, neque cum illis cõmunicaturos: ad hoc etiam firmitus statuendũ faceret illos, hoc promittere, & sub iuramento: non solum ego prædicta confeci, & promisi; sed etiam dedi consilium vicinis meis, vt & ipsi similiter facerent.*

No que diz respeito ao impedimento corrente, ou seja, à perseguição contra os padres e os cristãos, veio ter comigo um «Bughiõ», isto é, um regedor do xogun. Ele mandou-me assinar uma carta probatória do compromisso de não agasalhar os padres e de nunca mais me encontrar com eles. Como ele me pressionou para que fizesse um juramento escrito de maneira a assegurar a dita promessa, não pude deixar de obedecer ao que me mandou e aconselhei os meus vizinhos a fazerem a mesma coisa.

#### TERCEIRA CONFISSÃO ACERCA DA OBRA DE MISERICÓRDIA

Core va sando de gozatta ni, ichido va cami fotoqe ni caqete cõ itasu mai to xeimon tate to iitçuqerareta sacai ni, mi va cami fotoqe va ni<sup>123</sup> ni tatazu<sup>124</sup>, fon no xeimon no daimocu de nai tocorode, tçuideni togueidemo daiji aru mai to zonjite, gentio no buguiõ vo tabacaru tame bacari ni tate maraxita. Ichido va,

---

<sup>123</sup> Ni [荷]. *Cargo, ou fato*. ¶ Niuo tçumu [荷を積む]. *Arrumar o fato na embarcação*. ¶ Niuo nosuru [荷を載する]. *Embarcar fato*. ¶ Niuo vorosu [荷を降ろす]. *Desembarcar o fato, ou descarregar a besta*. ¶ Niuo vôsuru [荷を負うする]. *Carregar besta, ou boy*. ¶ Niuo vô [荷を負ふ], l, Niuo catçugu [荷を担ぐ]. *Leuar fato às costas*. ¶ Nijiruxi [荷印]. *Sinal, ou marca que poem no fato*. ¶ Nini motanu [荷に持たぬ]. *Não fazer caso, ou não se lhe dar nada* (*Vocabulario*, f.182). Não é explicada a expressão metafórica «Nini tatanu» no *Vocabulario da Lingoa de Iapam*.

<sup>124</sup> Esta expressão metafórica é definida pelo próprio frei Colhado como «*Nugæ, arum. Nugamenta, niñerias, impertinencias. Zõtan* [雑談], ni ni tatanu [荷に立たぬ]» (*Dictionarivm sive Thesavri Lingvæ Iaponicæ Compendivm*, p.288).

sate<sup>125</sup>, fon no Deus ni ca/p.58/qete igue no xeimono<sup>126</sup> tateta redomo, miga zonbun<sup>127</sup> ni va, padre sama ni iado vo caxi, von mi vo mexi tçucavaruru<sup>128</sup> coto, mottomo go iqen no uchi de gozare domo, go voqite no von uchi de gozanai tocorode, inochi vo tasucaru tameni, sono xeimon o<sup>129</sup> tatetemo xemete fucõ va consciencia ni cacaru maj to vomôte, tçucamatçutte gozaru. Ichido mo mata, mura no votona<sup>130</sup> buguiõ no dai<sup>131</sup> ni sõ saxerareta niotte,

---

<sup>125</sup> Sate [さて]. *Palaura que serue para saudar.* ¶ *Item, interjeicao em cousas de admiracao.* ¶ *Depois disso, &c* (*Vocabulario*, f.220v).

<sup>126</sup> Trata-se da ligação muito peculiar às obras de frei Colhado, acerca da qual se vê a explicação já citada do nosso frei dominicano na sua *ARS GRAMMATICÆ IAPONLÆ LINGVÆ* (p.63). Não se sabe se se deveria corrigir para uma forma mais normal «xeimon vo», ou para «xeimonno» de acordo com a descrição já citada do padre João Rodriguez Tçuzzu na sua *Arte da Lingoa de Iapam* (f.177v). «xeimono o» *in textu*.

<sup>127</sup> Zonbun [存分]. *Parecer, juizo, ou vontade.* ¶ *Zonbunno yoi fito* [存分の良い人]. *Homem de bom juizo, & parecer* (*Vocabulario*, f.329).

<sup>128</sup> Mexitçucai [召し使ひ], Mexitçucõ [召し使ふ], Mexitçucõta [召し使うた]. *Seruirse de alguem. Vt.* Fitouo mexitçucõ [人を召し使ふ]. ¶ *Figoro mexitçucõta fiquan* [日頃召し使うた被官]. *Criado de que hum se seruiu muito tempo* (*Vocabulario*, f.157v).

<sup>129</sup> Veja-se a nota anterior 123.

<sup>130</sup> Votona [乙名・大人・老名]. *Cabeça dos Fiacuxos. l, dalgum Machi, ou lugar.* ¶ *Item, Pessoa que ja tem idade, siso, & saber. Vt.* Votonani narareta [大人に成られた]. *Està ja feito homem, ou grande, &c* (*Vocabulario*, f.284v).

<sup>131</sup> Dai [代]. *Cauari* [代わり]. *Troco.* ¶ *Item, O que està em lugar de outro.* ¶ *Daiuo tatçuru* [代を立つる]. *Dar, ou por alguem em seu lugar, ou por si* (*Vocabulario*, f.69).

butaxinami<sup>132</sup>, uqito<sup>133</sup> xita iacusocu bacari, vomotemuqi<sup>134</sup> no fan o<sup>135</sup> suie saxerare maraxita reba, vare ga mōxita gotoqu, sando tomoni itaxi, mata, sureba atte mo fucai toga de gozarumai to tanin ni fixxito<sup>136</sup> mōxi maraxita. Ima made cono bun ni tçucamatçutta ga, jingon igo<sup>137</sup> va, guioi xidaini itaxi maraxôzu.

これは三度でござったに、一度は神・仏に懸けてかう致すまいと  
 誓文立てと言ひ付けられたさかいに、身は神・仏は荷に立たず、本  
 の誓文の題目でないところで、ついでに遂げいでも大事あるまいと存  
 じて、ゼンチョの奉行をたばかる為ばかりに立てまらした。一度は、  
 さて、本のデウスに懸 /p.58/けて以下の誓文を立てたれども、身が存

<sup>132</sup> Butaxinami [無嗜み]. *Pouco resguardo, & cautella, ou descuido* (Vocabulario, f.27v).

<sup>133</sup> Esta palavra, que não se regista no *Vocabulario da Lingoa de Iapam*, é definida pelo próprio frei Colhado como «Perfunctorie. Asobre peine. Vuamuqini [うはむきに], uqito [うきと] (*Dictionarivm sive Thesavri Lingvæ Iaponicæ Compendivm*, p.300).

<sup>134</sup> Vomotemuqi [表向き]. *Aparencia, ou foro exterior* (Vocabulario, f.281). Esta palavra é definida pelo próprio frei Colhado de uma maneira suavemente diferente como «*Exterius tantum. Asobrebaz, por cumplimientos. Vva muqi ni* [うはむきに], *vel, vomotomuqi ni* [表向きに] (*Dictionarivm sive Thesavri Lingvæ Iaponicæ Compendivm*, p.45). Colhado ainda apresenta-nos uma oração japonesa «*Qiguen vo toru tame fito vo vuamuqi\* ni fome, uru* [機嫌を取るため人をうはむきに褒め(褒むる)], a qual é declarada como «*Adulor, aris. Lisonjeat*» (*Dictionarivm sive Thesavri Lingvæ Iaponicæ Compendivm*, p.169). \*vuamuyo *in textu*. Correção feita por Ôtsuka Mitsunobu no seu Índice Remissivo (*ibid.*, p.156).

<sup>135</sup> Trata-se da ligação muito peculiar às obras de frei Colhado, acerca da qual se vê a explicação já citada do nosso frei dominicano na sua *ARS GRAMMATICÆ IAPONIÆ LINGVÆ* (p.63). Não se sabe se se deveria corrigir para uma forma mais normal «fan vo», ou para «fanno» de acordo com a descrição já citada do padre João Rodriguez Tçuzzu na sua *Arte da Lingoa de Iapam* (f.177v).

<sup>136</sup> Fixxito [ひっしと]. *Adu. Modo de fazer alguma cousa com efficacia, ou rijamente, ou modo de estar a cousa junta, & apertada. Vt, Fixxito vtçu* [ひっしと打つ], I, *Fixxito yamasuru* [ひっしとやまする]. *Dar pancadas rijamente* (Vocabulario, f.98).

<sup>137</sup> «jingon nigo» *in textu*.

ぶんには、パテレ様に宿を貸し、御身を召し使はるること、尤も御異

見の内でござれども、御掟の御内でござないところで、命を扶かる

ために、その誓文を立ててもせめて深うはコンシエンシアに懸かるまい

と思つて、仕つてござる。一度もまた、村の乙名・奉行の代にさう

させられたによって、無嗜み、うきとした約束ばかり、表面の判を

据ゑさせられまらしたれば、我が申した如く、三度共に致し、また、

すればあつても深い科でござるまいと、他人にひっしと申しまらした。

今までこの分に仕つたが、自今以後は御意次第に致しまらせうず。

先に申しましたことは三度起こりました。そのうちの一度は神・仏に懸けて、パテレたちに宿を貸したり彼らと逢つたりするようなことはせぬ旨の誓文をせよと言いつけられましたので、私にとっては、神・仏など大して精神的な負担となるものではない、拘束力のある本当の誓文に関わる事柄ではないと考え、つつい誓文の趣きをたとえ実行しなくとも大したことではあるまいと存じ、ただゼンチョの奉行を騙すという目的のため、神・仏に懸けて誓文を致しました。今一度は、本物のデウスに懸けて、そのような誓文を書きました。ただそれは、パテレ様へ宿を貸してさしあげたり、パテレ様に一身を召し使つていただいたりすることは、せいぜいそうしたほうが望ましいという程度のことにすぎず、必ずそうせねばならぬ掟ではあるまいと考えたのでございます。たとえそのような誓文を書いても、それは命を助かりたいと思う一念に出たことで、さほど深くコンシエンシアの咎めとはならぬと考え、さよう致しました。さらにもう一度は、村の長が、奉行の代理としてさような誓文を取りまして、そこでは、無用心で無思慮なことを述べ、いい加減な約束だけ致し、誓文と申しても形式だけの、実を伴わぬものでございました。しかし申しましたとおり、三度ともさような誓文に応じたことは紛れもなく、また、たとえどうしても深い科には当たるまいということ、他人には繰り返して強く主張致しました。今までこのようなありさまでございましたが、今後は、パテレ様の御意のままに仕ると致しましう。

*Hoc autem ter accidit: semel autem cum per Deos & idola praedictum iuramentum facere praecipisset, videns Deos gentilium & eorum idola nullius esse valoris, & consequenter per eos iuramenta facta non obligare (cum id quod est, fundamentum iui amenti non possit esse) vt possem tamen regis ministrum praedictum fallere: quo significauit sensu, iuramentum, & pro/p.59/missionem feci. Semel vero etiam si per*

*verum Deum iuramentum fecerim, considerās tamen patribus hospitium præbere, & cum illis commnicare, & illis inseruire non esse rem sub præcepto, etiam si sit vere sub consilio, credensque ob hoc non esse graue peccatū iuramentū facere circa rem huiusmodi ad saluādam vitam: ideo prædictum iuramentum fateor protulisse. Iterum verò cum caput nostræ villæ loco ministri regis prædictas diligentias faceret absque præcautione & sagacitate leuiter promissionem facere cogebat, & subscriptionem tantum in exteriori: vnde vt prædixi, non solum quod ad me attinebat hoc feci; sed dixi resolutorie non esse peccatum mortale hoc facere. vsque modo sic processi; deinceps vero faciam secundum quod vestra paternitas ordinauerit.*

Teve lugar três vezes o que tenho confessado. Quanto à primeira vez, por me mandar o «Bughiö» que fizesse o juramento pelos nomes de Cami e Fotoque de não agasalhar os reverendos padres e de nunca mais me encontrar com eles, obedeci ao seu mandamento só de forma a ludibriá-lo, pensando que o juramento tanto por Cami como por Fotoque não constituiria para mim uma «bagagem pesada» – tarefa difícil –, e que o juramento pelos seus nomes, por não ser uma matéria verdadeira, não teria grande importância, tendo-o levado a efeito. Quanto à segunda vez, fiz por certo o dito juramento pelo nome do «fon no Deus», isto é, o Deus autêntico e verdadeiro, pois julguei que o acto de agasalhar os padres e de lhes pedir para que se servissem de mim era apenas aconselhável e não fundamental, e que o não cumprir do sobredito acto não violaria a lei eclesiástica a guardar obrigatoriamente, e que o dito juramento, o qual apenas fiz de forma a salvar a própria vida, não me pesaria na consciência nem me remoeria de modo profundo. Quanto à terceira vez, fui forçado a assinar a dita carta probatória de acordo com o mandado do «Votona» que estava em lugar do «Bughiö», carta essa que era só de aparência e não substancial, pois escrevi aí só coisas de pouco resguardo e cautela, fazendo promessas vãs. Apesar de tudo isso, como já confessei, é verdade ter levado a efeito o dito juramento todas as três vezes e ter afirmado convictamente, dizendo a outros que não cometeríamos pecado assim tão grave se o fizéssemos. Até agora, tenho procedido desta forma, mas não deixarei de fazer como o reverendo padre quiser e mandar.

#### PALAVRAS DE UM CRENTE

Sono foca, vare va dai<sup>138</sup> acunin<sup>139</sup> de gozaru niotte, sadamete mixiranu, mi ni voboienu toga vovô gozarô zuredomo, voboietâ bun va mōxi aravaita made de gozaru. Corera miga fucâi aiamari de gozatta tocorode, Deus no go miōdai, sono toga no tçucunoi, von iuruxi, igo<sup>140</sup> no tame no go qeôqe<sup>141</sup> vo tçuxxinde<sup>142</sup> tanomi tatematçuru.

その外、我は大悪人でござるによって、定めて見知らぬ、身に覚えぬ科  
 多うござらうずれども、覚えた分は申し頭はいたまででござる。これら身が深  
 い誤りでござったところで、デウスの御名代、その科の償ひ、御赦し、以  
 後の為の御教化を謹んで頼み奉る。

要するに、私は大悪人でございまして、自分でも分からず身に覚えなく犯している科はきつと多うございまいしょうが、身に覚えのある分については、ここにはっきりと申し頭わしたわけでございます。これらは私の深い誤りでございまして、デウスの御名代であるパテレ様へ、その科の償いと御赦し、そして今後のための教訓なり訓戒なりを謹んで頼み奉ります。

*Præter hæc autem; cum ego magnus sim peccator peccata quæ non cognosco, & quorum non memini erunt multa; sed prædicta sunt de quibus sum recordatus, & quæ confiteor esse maxima & de quibus à vestra paternitate ministro Dei peto pœnitentia, veniam, & absolutionem, & in posterum vestrum consilium humiliter etiam postulo.*

Em suma: sou grandíssimo pecador, pelo que deve ser enorme o número dos pecados que não me lembro de ter cometido, mas quanto aos pecados de que estou consciente, tenho-os aqui declarado e confessado. Por se tratarem todos de meus erros, e sendo estes tão graves, peço com cortesia e reverência

<sup>138</sup> Dai [大]. Vôqina [大きな]. *Cousa grande.* ¶ Dai acunin [大悪人]. *Grande peccador.* ¶ Tçuçino dai, xô [月の大, 小]. *Se diz do mez de 30. ou 29. dias.* Cono tçuçi ua daide gozaru [この月は大でござる]. *Este mez he de 30 dias. Xôde gozaru [小でござる]. He de 29 (Vocabulario, f.69).*

<sup>139</sup> Acunin [悪人]. Axij fito [悪い人]. *Peccador, ou mau homem (Vocabulario, f.3v).*

<sup>140</sup> Igo [以後]. Nochi [後]. *Depois, ou ao diante (Vocabulario, f.130v).*

<sup>141</sup> Qeôqe [教化]. *Conselho, ou auiso em cousas de virtude, ou saluação.* ¶ Fitoni qeôqueuo nasu [人に教化を為す], I, Fitoni qeôqueuo suru [人に教化をする]. *Dar estes concelhos desta materia (Vocabulario, f.192v).*

<sup>142</sup> Tçuxxinde [謹んで]. *Com cortesia, & reuerencia (Vocabulario, f.251).* «tçuxxinde» in textu.



ao digníssimo representante de Deus que restituia os meus pecados, os perdoe, e me dê conselho e aviso relativos à virtude e salvação a respeitar daqui por diante.

PALAVRAS ENCORAJADORAS DO PADRE

P. Vôxearu gotoqu, mottomo toga no cazu mo fucasa mo icai coto naredomo, xinte iori sore vo ichiichi cōquai xi, futatabi vocasu mai to vomoi qitte, mina fitotçu mo nocosazu arauaxi atta: nõ<sup>143</sup>?

師 <sup>おほ</sup>仰せ<sup>ごと</sup>ある<sup>もつと</sup>如<sup>とが</sup>く、<sup>かず</sup>尤<sup>ふか</sup>も<sup>しんてい</sup>科<sup>の</sup>数<sup>も</sup>深<sup>さ</sup>も<sup>いかい</sup>いかい<sup>こと</sup>なれ<sup>ども</sup>ども、<sup>しんてい</sup>心底<sup>より</sup>それ<sup>を</sup>を<sup>いちいち</sup>一<sup>ごう</sup>々<sup>くわい</sup>後悔<sup>し</sup>、<sup>ふたたび</sup>二<sup>をか</sup>度<sup>を</sup>犯<sup>す</sup>まい<sup>と思</sup>ひ<sup>き</sup>切<sup>つ</sup>て、<sup>みなひと</sup>皆<sup>の</sup>一<sup>の</sup>つ<sup>あら</sup>つも<sup>を</sup>残<sup>さ</sup>ず<sup>頭</sup>は<sup>し</sup>あ<sup>つ</sup>た、  
なう。

師 申されたように、犯した科の多さも深さもさることながら、心底よりそれをひとつひとつ後悔し、再び犯すまいと思ひ切ったうえで、何ひとつ残さずに言い顕わしたではないか、のう。

P. *Profecto, sicut dicis, peccata tua sunt multa & grauissima; sed & si ita sit, poenitendo tamen de singulis ex intimis cordis, & cum firmissimo proposito non reincidendi, omnia nullo dempto dixisti? non est ita?*

P. De facto, como acabastes de confessar, são enormes tanto a frequência como a profundidade dos pecados que cometestes, mas tivestes a coragem de arrepender-vos dos vossos pecados do fundo do coração e de manifestá-los e declará-los sem excepção nenhuma com a firme determinação de nunca mais pecardes, não é isso?

PALAVRAS DO SOBREDITO CRENTE

R. Nacanaca, naniga Deus no go dai ni aiamari vo cacuxi<sup>144</sup> maraxô zo?

弟子 <sup>なに</sup>な<sup>ご</sup>かな<sup>だ</sup>な<sup>い</sup>か、<sup>あ</sup>何<sup>あ</sup>が<sup>ま</sup>デ<sup>か</sup>ウ<sup>く</sup>スの<sup>御</sup>代<sup>に</sup>に<sup>誤</sup>り<sup>を</sup>を<sup>隠</sup>し<sup>ま</sup>ら<sup>せ</sup>う<sup>ぞ</sup>ぞ?

弟子 いかにも。デウスの御名代に何として誤りを隠しとおせましようや。

R. *Ita est profecto: quare enim Dei substituto abscondam aliquem ex meis defectibus?*

R. Em verdade. Como é que se poderiam manter secretos os erros e culpas

<sup>143</sup> Nô [のう]. *Particula de chamar por alguém. i, Oulà (Vocabulario, f.184v).*

<sup>144</sup> Cacuxi [隠し], Cacusu [隠す], Cacuita [隠いた]. *Esconder alguma cousa, ou ter em segredo (Vocabulario, f.12).*

que cometi perante o nosso reverendíssimo representante de Deus?

PALAVRAS ENCORAJADORAS DO PADRE

P. Saraba<sup>145</sup>, caiõnaru<sup>146</sup> cazucazu no fucai toga no von iuruxi, Deus no muriõ quõdai<sup>147</sup> mufen no von jifi no tame ni va ito<sup>148</sup> iasui coto gia tocoro de, sono bun cocoroieare.

師 さらば、<sup>か やう かずかず ふか とが おんゆる</sup> 斯様なる数々の深い科の御赦し、<sup>むりやう くわうだい む へん</sup> デウスの無量・広大・無辺

<sup>おんじひ ため やす</sup> の御慈悲の為にはいと易いことぢやところで、<sup>ぶんこころえ</sup> その分心得あれ。

師 よろしい。かような数々の深い科の御赦し、デウスの無量・広大・無辺の御慈悲の前にはいとも易きことなれば、さよう心得なさい。

*P. Cum ergo hoc ita sit: venia peccatorum est facillima, infinitæ & immensæ misericordiæ Dei; et ita debes intelligere.*

P. Muito bem. Saiba que será tão fácil a absolvição dos pecados que cometeste perante a imensa, grande e infinita misericórdia de Deus.

<sup>145</sup> Saraba [さらば]. *Ficai em hora, ou ide embora.* ¶ *Item, Fyusus.* ¶ *Item, Ia que assi he (Vocabulario, f.219v).*

<sup>146</sup> Cacaru [斯かる]. *Adiect. i. Cayõnaru [斯様なる], l, Cacuno gotocu naru [斯くの如くなる]. Desta laya, ou desta maneira.* ¶ *Cacaru tocoroni [斯かるところに]. i. Cacuno gotocu naru [斯くの如くなる]. Desta laya, ou desta maneira.* ¶ *Cacaru tocoroni [斯かるところに]. i. Cayõnaru [斯様なる], l, Cacunogotocu aru tocoroni [斯くの如くあるところに]. Adu. Sendo assi (Vocabulario, f.30). Veja-se também o verbete «Cacari, u, atta». Cf. Cacaru [斯かる], i, Cayõnaru [斯様なる], l, Cacunogotoqu [斯くの如く]. *Semelhante, ou tal. Vi, Cacaru meiuacu [斯かる迷惑]. Tristeza, ou afflicção tal como esta (Vocabulario, f.29v).**

<sup>147</sup> Quõdai [広大]. Firõ vòqina [広う大きな]. *Cousa mui larga, & grande. Vi, Quõdai mufen [広大無辺]. Cousa immensa, & infinita (Vocabulario, f.205v).*

<sup>148</sup> Ito [いと]. *Adu. Com razão, ou muito. Vi, Ito yasui cotonari [いと易い事なり]. He cousa muito facil (Vocabulario, f.136). Cf. Itomo [いとも]. Adu. Com muita rezam (Vocabulario, f.358).*